

国道9号線バイパス建設予定地内

## 埋蔵文化財発掘調査報告書

— III —

昭和56年3月

島根県教育委員会

国道9号線バイパス建設予定地内

## 埋蔵文化財発掘調査報告書

— III —

昭和56年3月

島根県教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、昭和55年度に建設省広島建設局から委託をうて実施した一般国道9号線松江東バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概報である。

2. 昭和55年度は、次の6遺跡の暫定道路部分の発掘調査を実施した。

①森口遺跡 ②大畠遺跡 ③布田遺跡 ④中竹矢遺跡Ⅰ区（盛土部） ⑤才ノ峰遺跡 ⑥石台遺跡Ⅰ区（橋台部）

3. 調査組織

調査主体 島根県教育委員会

調査指導 山木清（島根県文化財保護審議会委員・島根大学名誉教授）、町田章（同・奈良国立文化財研究所）、浪賀毅（文化庁文化財調査官）、小田富士雄（北九州市立歴史博物館主幹）、三辻利一（奈良教育大学教授）、甲元真之（熊本大学文学部助教授）、藤原宏志（宮崎大学農学部助教授）、大西郁夫（島根大学理学部教授）、渡辺貞辛（島根大学法文学部講師）

事務局 島根県教育庁文化課 課長 遠藤豊、主査 藤間亨、課長補佐 長谷川行雄、文化振興係係長 秋月延大、埋蔵文化財係係長 滝部昭、田根裕美子

調査員 門脇裕（文化課（兼）文化財保護主事）、黒谷達典（同（兼）文化財保護主事）、片寄義春（同（兼）文化財保護主事）、村尾秀信（同（兼）文化財保護主事）、内田律雄（同主事）、瀧山和男（同主事）、平野芳英（八雲立つ風土記の丘）、柳浦俊一（同）、広江耕史（同）、足立克己（同）、松尾二郎（同）

島根県埋蔵文化財調査員 池田嵩雄、門脇俊彦、横山純夫、勝部理恵子

4. 遺構は、堅穴住居SI、構SD、土塙・貯藏穴SK、獨立柱建物SBの略号を付した。

5. 概報作成にあたっては、調査員が分担し文責をそれぞれ文末に明らかにした。

## はじめに

昭和55年は、春から雨が多く夏になっても気温が上らず、低温による被害が全国的に広がり、60数年来といわれる異常気象でこの年は「冷夏」という言葉が生まれました。その夏の冷たい雨の中、松江市竹矢町の才ノ峠遺跡の場合は雨、ぬかる土とたたかいながらの発掘調査作業が続きました。

昭和57年島根県で開催される「くにびき国体」に国道9号線松江東バイパスを間に合わせるため幅員約14mの暫定道路部分の埋蔵文化財発掘調査を昭和55年度、56、57年度の三ヵ年計画の予定で実施することになりました。昭和55年度は第一次年度として、島根県教育委員会が建設省中国地方建設局から委託を受けて実施したものであります。すでに昭和50年度、51年度にも道路予定部分の発掘調査が行なわれており、すでにその成果は公刊しておりますが、さらに本年度調査を開始したものであります。

この調査のため島根県教育委員会では、調査員を増員し、9号線バイパス遺跡調査現場事務所として文化課矢田分室を新設して調査にあたることにしました。本年度の調査は規模が大きく、加えてこの年の悪天候も重なって調査は種々難渋しましたが、関係者の協力によって調査を実施することができました。

建設省中国地方建設局をはじめ地元および事業関係の方々に厚く御礼申し上げます。

昭和56年3月

島根県教育委員会教育長 水津卓夫

## 目次

1. 遺跡の位置と歴史的環境 .....	(1)
2. 石台遺跡Ⅰ区 .....	(5)
3. 春日遺跡Ⅰ区 .....	(7)
4. 才ノ峠遺跡 .....	(9)
5. 中竹矢遺跡Ⅰ区 .....	(14)
6. 布田遺跡 .....	(19)
7. 夫敷遺跡 .....	(29)
大敷遺跡におけるプラント・オパール分析 .....	(31)
8. 小結 .....	(34)

## 挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	4
第2図	石台遺跡I区トレンチ配置図	5
第3図	石台遺跡土層図	6
第4図	春日遺跡I区調査区配置図	7
第5図	春日遺跡Bグリッド土層断面図	8
第6図	才ノ岬遺跡出土遺物 (1)	10
第7図	" (2)	11
第8図	" (3)	12
第9図	才ノ岬遺跡丘陵部造構配置図	13
第10図	中竹矢遺跡I区土壙内出土土器	16
第11図	中竹矢遺跡I区出土木製品	18
第12図	中竹矢遺跡I区造構配図	19
第13図	布田遺跡掘立柱建物跡	22
第14図	布田遺跡第Ⅲ区造構図	23
第15図	布田遺跡SI 04出土遺物	24
第16図	布田遺跡SK 09出土遺物	25
第17図	布田遺跡SD 10出土遺物	26
第18図	布田遺跡SD 11出土遺物	27
第19図	布田遺跡出土遺物	28
第20図	夫敷遺跡水田造構図	33
第21図	夫敷遺跡におけるプラントオバール定量分析結果 (18グリッド北壁)	36

## 図 版 目 次

- 図版 1-1 才ノ峰遺跡丘陵部全景  
〃 1-2 才ノ峰遺跡水田部全景  
〃 2-1 才ノ峰遺跡第1加工段 SB-01  
〃 2-2 才ノ峰遺跡丘陵部第1~7加工段  
〃 3 才ノ峰遺跡出土遺物  
〃 4 才ノ峰遺跡出土遺物  
〃 5 才ノ峰遺跡出土遺物  
〃 6 才ノ峰遺跡出土遺物  
〃 7-1 中竹矢遺跡I区土塘群  
〃 7-2 中竹矢遺跡I区SB01  
〃 8-1 中竹矢遺跡I区木製犁出し状態  
〃 8-2 中竹矢遺跡I区木製鉢出土状態  
〃 9 中竹矢遺跡I区出土土器  
〃 10-1 布田遺跡SA01、SB01、02  
〃 10-2 布田遺跡SB01柱穴内礎板  
〃 11-1 布田遺跡SD08~10  
〃 11-2 布田遺跡SD08~10  
〃 12-1 布田遺跡SI01  
〃 12-2 布田遺跡SD12  
〃 13-1 布田遺跡作業風景  
〃 13-2 布田遺跡SK02  
〃 14-1 布田遺跡SD11内高坏出土状況  
〃 14-2 布田遺跡SK09  
〃 15-1 大敷遺跡発掘風景  
〃 15-2 大敷遺跡第6層水田跡  
〃 16 植物珪酸体標本 大敷遺跡第5層出土プラント・オバール

## 1. 遺跡の位置と歴史的環境

松江東バイパス予定地内には9遺跡が存在しており、そのうち平所遺跡、才ノ峰古墳群はすでに昭和50年、51年に発掘調査を完了している。以下、調査対象遺跡とその歴史的環境の概要を述べることにする。

### 1. 各遺跡の位置と環境

#### (1) 春日遺跡（八束郡東出雲町山陰郷 1426番地外）

春日遺跡は意宇平野の南側につらなる山塊の裾に沿って東流する意宇川が北に進路を変えるあたり、須田川との間の沖積地に立地する遺跡である。かなり古くから知られていた遺跡で、水田の掘削に伴い弥生式土器、土師器、銅鏡片などが発見されている。昭和54年の水路掘削に伴う発掘で弥生、古墳両時代の包含層が確認されており、多量の弥生式土器をはじめ、かんざし状青銅製品も出土している。また、弥生時代の溝状遺構が検出されており、大規模な集落、墓地の存在が予想される。遺跡は東西400m、南北500mの広範囲にわたるものと推定されている。

#### (2) 夫敷遺跡（八束郡東出雲町出雲郷 1606番地外）

夫敷遺跡は意宇川をはさんでその西側に位置している。当遺跡はかつて出雲国府跡およびこれに併設されていたという意宇郡郡家跡に比定されていたところである。昭和51年試掘調査で、弥生時代から奈良、平安に至る各時代の遺物が出土しており、付近に何らかの遺構が存在していることが予想される。

#### (3) 布田遺跡（松江市竹矢町 1260番地外）

布田遺跡は上記の夫敷遺跡のさらに西方の沖積平野の微高地に立地している。以前から耕地整理その他に伴って石器、弥生式土器、土師器、須恵器等が採集されており、昭和49年の試掘調査では、弥生前期後半、後期後半の土器および石器が多数出土している。このことから弥生前期後半頃から居住が開始され古墳、奈良時代まで集落が営まれた可能性が強く、奈良時代には國分寺、國分尼寺関係の集落があったとも考えられる。

#### (4) 中竹矢遺跡（松江市竹矢町 609番地外）

中竹矢遺跡は、中竹矢古墳、社日古墳群などが存在する丘陵から南東の水田まで広がる遺跡である。丘陵上には上記の古墳が築造されているが、幸いバイパス内には顯著な古墳は少ない。しかし、それでも小規模な古墳、あるいは古墳と思われる高まりが5から6基存在しており、また、人為的な平坦部も存在するところから住居跡のあることも予想される。付近には國分寺、國分尼寺に瓦を供給したと考えられる瓦窯跡があり、窯から水田部にかけては國分尼寺調査の際に奈良時代の土器が多数出土している。

#### (5) 才ノ峰遺跡（松江市竹矢町 110番地外）

才ノ峰遺跡は國分寺跡の北方400m付近の丘陵から前面の水田に至る間に遺跡が立地している。標

高約30mの丘陵上には才ノ井古墳群があり、1号墳、方墳（一辺15m）、2号墳、前方後方墳（復元長20m）で構成されている。この古墳に続く丘陵斜面から奈良時代の須恵器、土師器、土製文脚などが出土し同時代の集落があったことが予想される。また水田中から須恵器、土師器が出土していることが知られている。

(6) 勝負古墳（松江市東津田町 2142番地外）

勝負古墳は、北に馬橋川の沖積低地を臨む丘陵の先端部に位置し標高15m程度である。諸塗によって一辺10m前後、高さ1m弱の盛土が認められ一部に葺石らしき河原石も確認されたが詳細は不明である。

(7) 石台遺跡（松江市東津田町 1796番地外）

石台遺跡は、上記の勝負古墳の西方にあり馬橋川流域沿いに立地している。昭和51年馬橋川の改修工事中に地表下約1から1.5mの青黒色粘土層から多数の遺物が発見された。出土遺物には、縄文土器をはじめ、弥生土器、古式土師器、土師器、石器類などがあり、縄文後晩期から古墳時代の遺物が採集されている。縄文土器は大半が後晩期のもので、粗製土器片には粗粒らしき圧痕の残っている土器もある。弥生土器は前期から後期にわたり、完形の高環も出土している。石器類は大形打製石斧のほか、石鎌や磨製石斧がある。遺跡周辺の地形や遺物の包含状態から、弥生前期以降継続的な居住地域であったことが考えられ、広範囲な集落跡が想定されている。

## 2. 松江東バイパス予定地周辺の遺跡

島根県教育委員会が昭和47年から48年にかけて行なった遺跡分布調査によると松江東バイパス予定地周辺には100以上の遺跡が存在することが判明している。以上、時代を追って主な遺跡について述べる。

(1) 縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡では、才塚遺跡（松江市竹矢町才塚）、法華寺前遺跡（同町法華寺前）、旧竹矢小学校校庭遺跡（同町）、さっぺい遺跡（松江市八幡町山本）などが知られ、縄文土器片、石鎌、石器の発見が伝えられている。時期的には前期や中期にさかのぼる遺跡とされている。遺跡の位置的な特徴としては、この時代の遺跡はみな意宇平野の北側周辺の丘陵裾部に存在していることがある。

(2) 弥生時代の遺跡

弥生時代になると遺跡は丘陵裾部からさらに意宇平野の中央部へと分布の広がりを見せ、数も縄文時代より増加の傾向を示している。平浜八幡宮の参道南方にある宮内遺跡（松江市竹矢町）、平野への中央部に位置する布田遺跡（同町）、三軒屋遺跡（同町）、宮の後遺跡（同町）などがあり、さらに周辺には春日遺跡（東出雲町出雲郷）、阿太加夜神社境内遺跡（同町）、夫敷遺跡（同町）、丁ノ明神遺跡（松江市大草町）などが分布している。これらの遺跡から弥生時代の遺物が多数出土しており、特に1で述べた布田遺跡からは弥生時代前期後半の特徴をもつ土器が認められている。

(3) 古墳時代の遺跡

古墳時代初頭に入ると、松江市八幡町的場土塚墓にみられるような埴輪も現われる。ここからは古式土師器のなかでは最古とみられる土器が出土している。

これにつぐものとしては、松江市矢田町来美にある来美古墳があげられ、いわゆる四隅突出型の特殊方墳として注目されている。

古墳時代中期以降になると茶臼山の西側山麓、山代町の台地と茶臼山の東北側にあたる大橋川沿いの丘陵に次々と大形の古墳が築造される。すなわち、前方後方墳で全長90m以上を測り、県下最大級の山代二子塚、その西南水田中には古くから方墳として著名な大庭鷺塚、また、大橋川沿いの丘陵上に築かれた前方後円墳の手間古墳、魚見塚古墳、井ノ奥4号墳などがある。さらに中竹矢の丘陵には才ノ峠古墳消滅）のほか竹矢岩舟古墳がある。

6世紀前半頃になると意宇平野の南側の大草丘陵には西百塚、東百塚古墳群が形成されその数約80基を数える。

ついで6世紀後半には、前方後方墳で内部構造に横穴式石室をそなえ、家形石棺を内蔵する岡田山1号墳（松江市大草町有）、御崎山古墳（同町）などが築かれる。また、この地方に特徴的な石棺式石室が盛行し、山代円墳（松江市山代町）、山代方墳（同町）、岩屋後古墳（松江市大草町有）、古天神古墳（同町）などにそれが内蔵されている。

これらの影響を受けながら横穴群が形成されるのもこの時期以降である。松江市矢田町には王面横穴群があり37穴以上を数え、現存しているものは27穴である。複室構造のもの、玄室内に石棺を備えたものの、線刻壁画のあるものなど、出雲地方の代表的横穴群である。近くには狐谷横穴群もある。

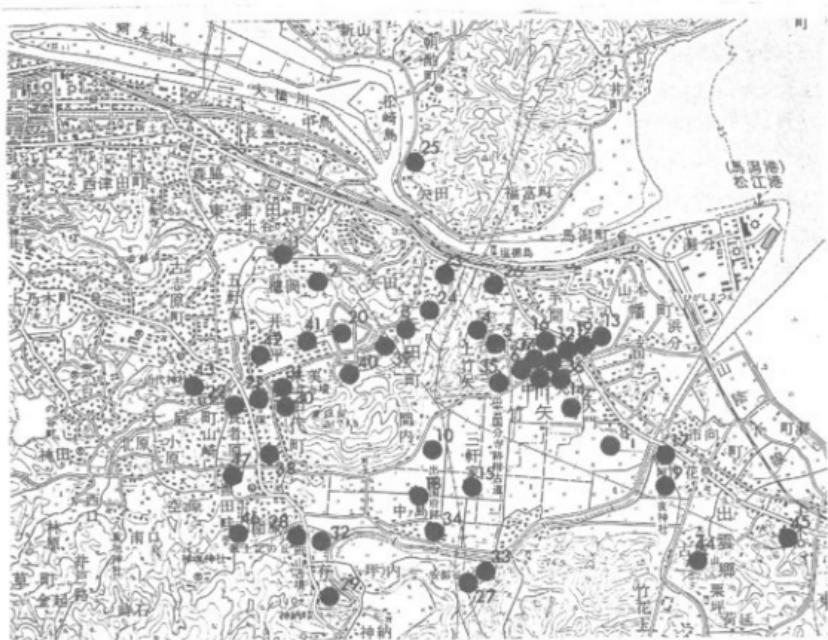
#### ④ 歴史時代の遺跡

律令制時代になると、意宇平野中央部南側の松江市大草町六所神社付近に出雲国庁が設置される。一方、意宇平野北東の台地には出雲国分寺、尼寺が造営され、まさにこの地は出雲国の中心地であったといえる。出雲国分寺の東側、県道沿いの民家の裏には瓦窯跡がある。ここでの瓦は国分寺、尼寺、国庁で発見されたものと同じ文様であること、二寺に近いことから官瓦窯であったと考えられる。

また、茶臼山南西麓には山代郡正倉跡が調査の結果明らかになり、国指定を受け、保存されることになった。

松江東バイパス予定地周辺の遺跡の概要は以上のとおりである。

（片寄義春）



第1図 周辺の遺跡 (1:25000)

1. 石台遺跡
2. 勝負古墳
3. 平所遺跡
4. 才ノ岬古墳群
5. 才ノ岬遺跡
6. 中竹矢遺跡
7. 布田遺跡
8. 夫敷遺跡
9. 春日遺跡
10. 才塚遺跡
11. 法華寺前遺跡
12. 旧竹矢小学校校庭遺跡
13. さっぺい遺跡
14. 宮内遺跡
15. 三軒屋遺跡
16. 宮ノ後遺跡
17. 阿太加夜神社境内遺跡
18. 丁ノ明神遺跡
19. 的場古墳群
20. 来美古墳
21. 山代二子塚
22. 萬塚
23. 手間古墳
24. 井ノ奥4号墳
25. 魚見塚
26. 竹矢岩舟古墳
27. 百塚古墳群
28. 岡田山古墳
29. 御崎山古墳
30. 山代円墳
31. 山代方墳
32. 岩屋後古墳
33. 古天神古墳
34. 国府跡
35. 国分寺跡
36. 国分尼寺跡
37. 瓦窯跡
38. 山代正倉跡
39. 十王面横穴群
40. 狐谷横穴群
41. 来美庵寺
42. 井手平古墳
43. 向山西古墳群
44. 古城山古墳群
45. 大木古墳群
46. 出雲国造館跡
47. 東淵寺古墳

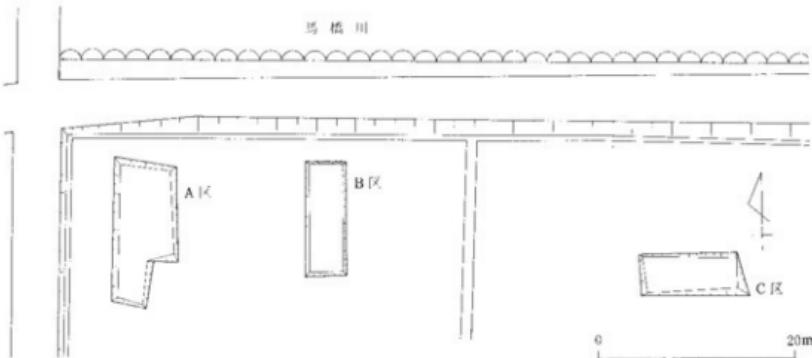
## 2. 石台遺跡 I 区

石台 I 区は国道 9 号線バイパスが馬橋川にかかる、その橋台部で発掘調査以前は水田として利用されていた。発掘区内には A、B、C の三ヶ所にトレンチを設定し調査を行なった。各トレンチの概要は次のようである。

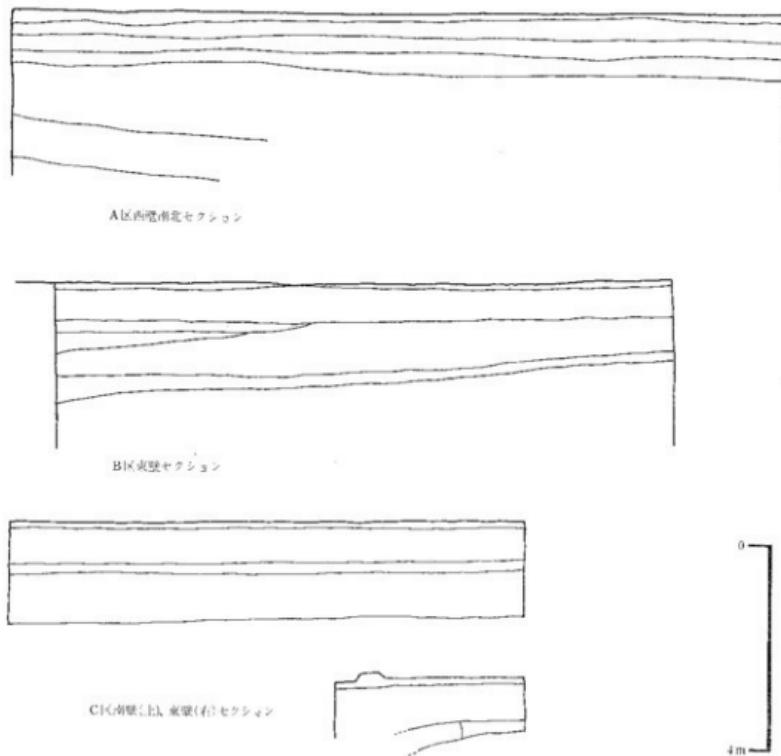
A 区。 南北 15m、東西 7m、深さ 5m。I 層から VI 層まで確認した。I 層は耕作土。II 層は褐色粘土層で砂を混入し赤色に変化している部分がある。IV 層は黒灰色粘土層で植物を多く混入し粘性が強い。IV 層は灰色粘土層で III 層に似ている。V 層は黒色有機質土で植物のみによって成っている。VI 層は青灰色粘土層で砂質の粘土で小石を含む。VII 層は青灰色砂礫層で人頭大、あるいはそれ以上の大きな石、及び砂からなる層。これら遺物が発見されたのは I 層、II 层、V 层である。I、V 层からは須恵器、土師器の細片、V 层からは繩文陶期の粗製土器片が出土した。土層は、東西はほぼ水平に堆積しているが、南北は III 层あたりから馬橋川のある北にむかひ徐々に低くなり下層にいくにつれ傾斜は大きくなる。II、III 层は水田の客土であろう。

B 区。 南北 12m、東西 4m、深さ 3m。I 層から VII 層まで確認した。I 層は耕作土で、須恵器、土師器の細片、黒曜石のチップが出土した。II 層は黒灰色粒土層で水田の客土と考えられる。III 层は灰色の砂層でトレンチの中ほどから北にむかひはじめる。VII 層は III 层の下にあり、砂と大きな流木が交互に堆積した層で、北にむかひ深くなる。IV 層は灰色粘土層、V 層は灰茶褐色土層で北にむかひ低くなる。VI 層は黒有機質土でやはり北にむかひ低く傾斜する。流木と木の実が多くみられる。

C 区。 南北 4m、東西 8m で I 層から V 層まで確認した。I 層は耕作土、II 層は灰白色粘土層で客土と考えられる。III 层は黒灰粘土層で薄く堆積する。VI 層は砂層である。V 層は褐色有機質土、II 層の中より、青磁碗が一点出土した。底部のみで 16 から 17 世紀の中国製品と考えられる。南壁断面



第 2 図 石台遺跡 I 区トレンチ配置図



第3図 石台遺跡土層図

はⅠ層を除き、わずかに東にむかい底く傾斜している。

A、B、C各トレンチの土層の状態をみると、馬橋川にむかい除々に堆積しているのが判る。Ⅰ、Ⅱ層を除くと、各土層は自然に堆積したことが考えられる。AトレンチV層出土の縄文式土器片も流入と思われる。これらの土器の状態は石台遺跡I区あたりが長い間にわたり湿地帯であったこともあり、また、現在の中ノ海につながる入江であったこともあったことを示すものであろう。これらの土層の中に人工的な造構を見出すことは出来なかった。しかし、Ⅰ、Ⅱ層のように水田耕作の為に他から運ばれてきた土層の中に、原始、古代の遺物の破片を検出したことは、この遺跡から、そう遠くなないところに出土遺物の示す時代の遺跡が存在することを示している。

(内田伸雄)

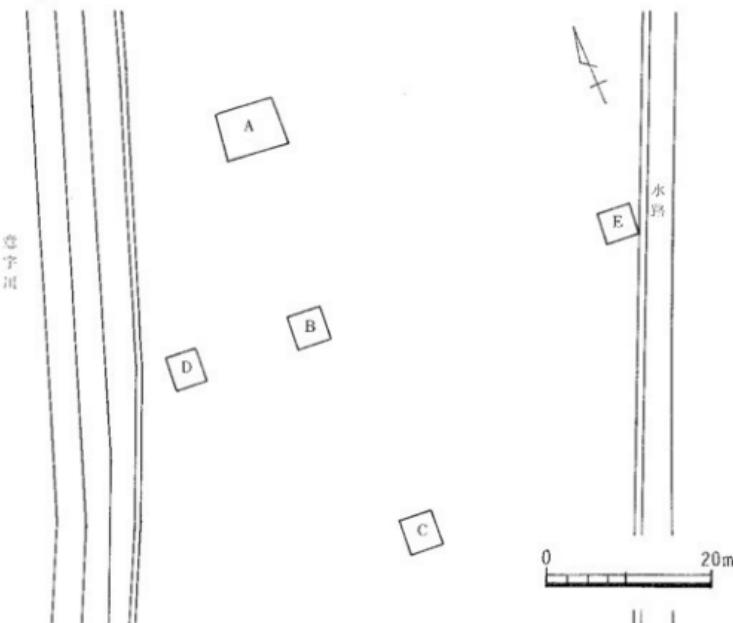
### かすが 3. 春日遺跡 I 区

本遺跡は、意宇川東岸に隣接しており、現在は、水田として利用されている。本調査区では、AからEの5つのグリッドを設定し、調査を進めた。なお、Aグリッドは7m×6m、BからEグリッドは4m×4mのものをBグリッドを中心東西南北の四方向に設定した。以下、グリッド毎にその概要を説明する。

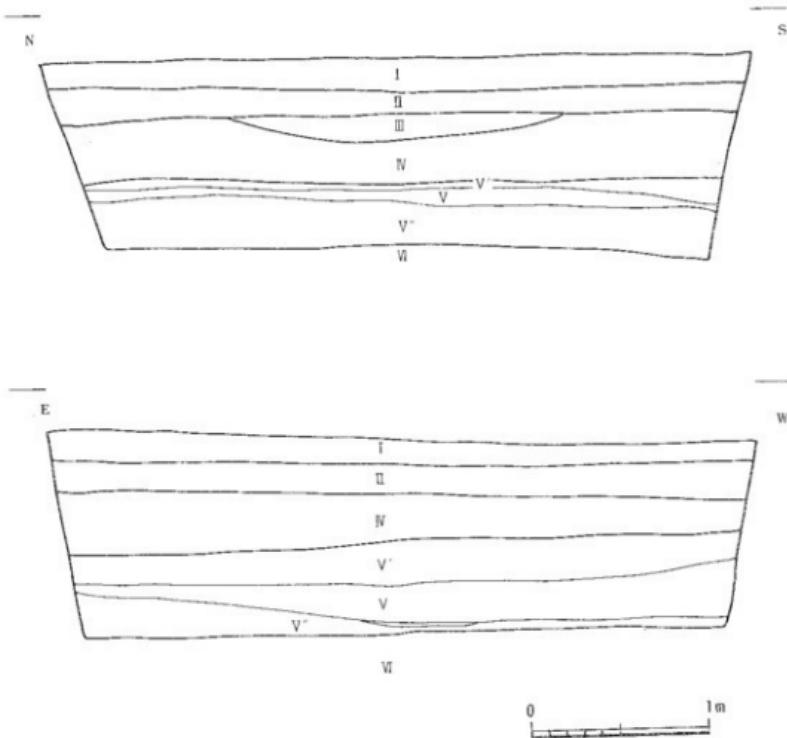
Aグリッド層序は、第I層（耕作土層）、第II層（客土層）が約30cm、第III層（青灰色粘質土層）が36cm、第IV層（青灰色砂層）が18cmと続き、以下、第V層（砂礫層）となる。遺物は、第V層より繩文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中国製白磁、中近世陶磁器の破片を検出したのみで、他の層には遺物を全く含んでいなかった。これらの遺物はいずれも磨滅が著しい。

Bグリッド層序は、Aグリッドと同じであるが、その厚さは第I層15cm、第II層16cm、第III層30cm、第IV層40cmとなっている。遺物は、Aグリッドと同様に第V層より磨滅した土師器、須恵器の破片を検出した。

Cグリッド。Aグリッドと同じ層序で、それぞれ第I層10cm、第II層5cm、第III層55cm、第IV層50



第4図 春日遺跡 I 区調査区配置図



第5図 Bグリッド土層断面図

I 條作土	II 客 土	III 茶褐色砂層	IV 青灰色粘質土質
V 青灰色砂層	V'	灰色砂層	V'' 淡青灰色砂層
			VI 砂礫層

cmの厚さをもつ。遺物は、磨滅した須恵器の破片を検出したのみである。

Dグリッド。Aグリッドと同じ層序で、それぞれ第I層16cm、第II層20cm、第III層30cm、第IV層50cmの厚さをもつ、第V層より磨滅した弥生土器、土師器、須恵器の破片を検出した。

Eグリッド。Aグリッドと同じ層序で、第I層15cm、第II層5cm、第III層55cm、第V層200cmの厚さをもつ。

以上の結果から、本調査区はかつて意宇川川床であったものと推定される。

(岡山和男)

## 4. 才ノ峠遺跡

今回調査を行った範囲内は、丘陵部と水田部に分けることができる。丘陵は、意宇平野の北東部の丘陵内の1つであり、東西175m、南北90m、標高30mを測る。今回検出した遺構は、丘陵部だけにある。丘陵部は、南側斜面を段状、平坦に削り、7つの加工段を造り出している。それらの各加工段には、掘立柱建物16、掘立柱に伴う住居址状の遺構6、土壙2が存在している。柱立柱建物は、第1加工段1、第2加工段9、第3加工段1、第4加工段1、第6加工段に4軒ほどあり、土壙は第3加工段に2基、住居址状の遺構は第2加工段1、第3加工段2、第4加工段1、第5加工段1、第7加工段に1基検出している。掘立柱は、2間×3間を基本としており、秘柱ではない。第1加工段のSB01は、2間(4.10m)×3間(6.65m)で、柱は直径60~70cmの円形のものが8、60cm×70cmの隅丸方形のもの2、深さは、40cm~80cmである。SB01は、規模も本調査区内で最大であり、丘陵頂上部に位置していることより特殊な建物であったようだ。SB01の西側には、才ノ峠1号墳との間に遺構の存在しない空白地帯があり、広場状の場所であったと思われる。

**水田部** 水田部は土層中に木片、植物等を混入していることから湿地帯であったようで遺構は無く検出していない。

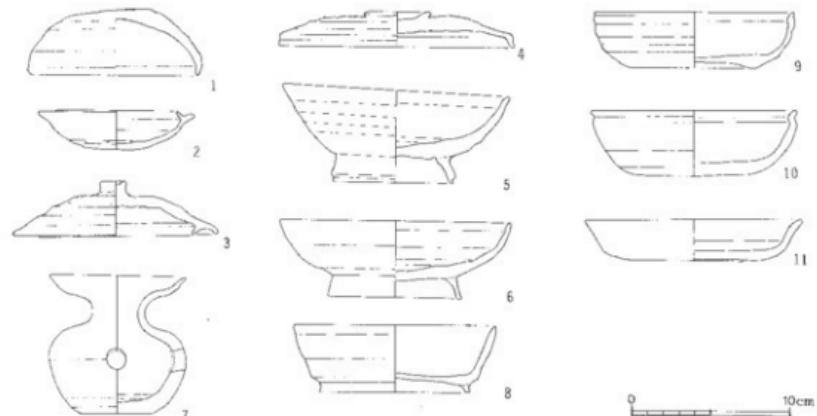
### 遺物(図版3・4・5・6)

須恵器は、丘陵部から出土したものである。第6図-9は第2加工段、3・10は第4加工段、1・4・5・7は第6加工段から、8・11は第6加工段下部斜面より出土している。4・5はSB-14、15のいづれかに伴うと思われる。1は蓋で天井部にヘラ削りを施さず稜線も消えている。2は、小形の坏で立ち上がりがわずかに受部より高い。3は蓋で頂部は平坦に削ってつまみを付け、縁端部の内面にかえりをつける。かえりの高さは縁端部とほぼ同じである。4は坏でかえりが消滅し、縁端部が直立する。天井部はヘラ削りの後、輪状のつまみをつける。5・6は坏で高台がやや外傾し坏部は丸みを帯びている。8は坏で低い高台が外傾して付き底部から口縁部にかけて直線的に外傾する。9・10は坏で口縁部がくびれている。11は底部から体部にかけ丸みを帯び、口縁部が外傾している。8・10・11は回転糸切り、9は静止糸切りを施している。土馬(第7図-12)は水田部より出土しており、高さ6.6cm、体長12.2cm、重量154.5gある。須恵器の裸馬ではほぼ完形である。他にも4個体分の破片が出土している。図版4-13は、竹管によって馬具を表現する土馬の首の部分である。右鉛(第7図-13)は、丘陵部第4加工段2号住居址ピット内より出土している。これは、鳴らすためのものではなく石を削って鉛の形を模造したものである。土鉛(第7図-14)は水田部より出土しており、長さが7cm、球の径が4cmあり、重量は65.7gある。球の側面に7ヶ所穴をあけ、下部には切れ込み状の穴を1ヶ所あけている。中は空洞で小石が入っており鳴らすようになっている。もう1個体破片が出土している。手捏土器(第7図-15)は、水田部より出土している。直径5.1cm、高さ3cm、厚さ0.4~0.6cmある。手捏土器は、丘陵部、水田部から、約70個体出土している。第7図-16は土製

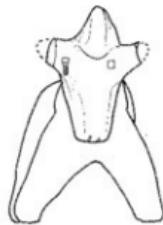
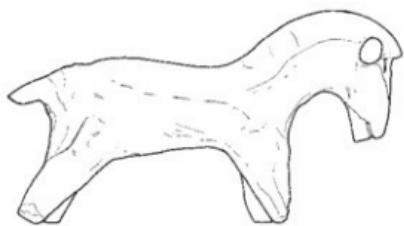
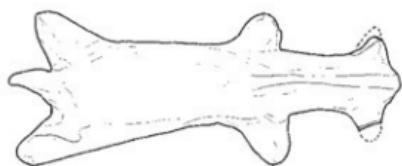
支脚のミニチュアと思われ、高さ3.2cmあり、水田部より出土している。土鍤には3つの形がある。第8図-17は、直径1.8cm、長さ6.8cmと細長くつくられる。18は、直径3.6cm、長さ5.1cmあり、17・18ともに指で握って成形した様子がうかがえる。19は、球形に造られており径4.5cmある。これらはともに水田部から出土しているが、丘陵部からも出土している。瓦は、軒平瓦（図版5-19、20）と軒丸瓦（図版5-21、22）があり、ともに唐草文帯の周間に珠文帯をめぐらしており、国分寺出土の瓦と同じものである。木製品は、水田部から出土している。下駄（図版6-23）は、一部を欠くが残存する長さ18.2cm、幅6cm、歯の部分の厚み2cmある。曲物容器の蓋（図版6-24、25）の円形状の一部と思われ、厚み0.5cmあり側板と固定するための桜皮が残っている。火鑊臼（図版6-26）は、長さ23.2cm、幅5cm、厚み2.3cmあり上下の両方から切り込みを入れて4ヶ所使用している。もう一点（27）は、長さ22.2cm、幅3.5cm、厚み2.5cmあり5ヶ所使用している。琴柱（図版6-28）は、長さ4.6cm、高さ2.5cmで三角形の頂上部に弦をかけるための切り込みを入れている。

**まとめ** 遺物からみると、丘陵部と水田部は密接な関係にあると思われる。出土している土器類は、2ヶ所ともほぼ同一時期であり、一部占墳時代後期にかかるものもあるが、飛鳥～奈良時代を中心としているようである。遺物の中に多量の手捏土器、土馬数個体、火鑊臼2個体を伴うことにより祭祀的色彩が強いようである。遺跡の位置は『出雲國風土記』に「國の庁より海辺に通う道」とされる道の東方であり、南方の意宇半野には出雲國分僧、尼寺、及び瓦窯址がある。今回調査したところ、出土遺物に瓦、墨書き器、陶器、木簡が含まれており、木遺跡とそれら律令時代の遺跡とは密接な関係にあるようである。

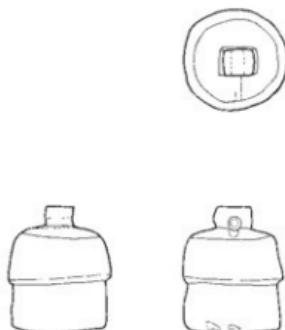
#### 図 6 統一



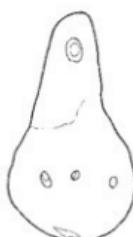
第6図 オノ岬遺跡出土遺物 (1)



12



13



14



15



16



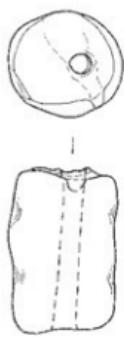
0

10cm

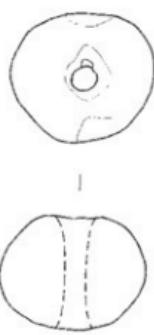
第7図 才ノ岬遺跡出土遺物 (2)



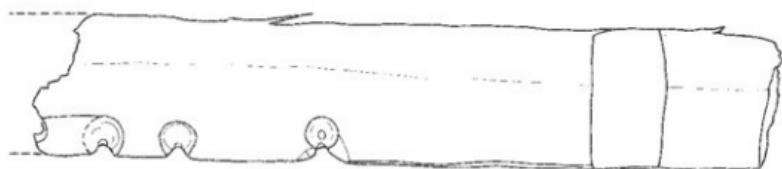
17



18



19

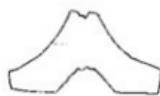


20



0

10 cm



21

第8図 才ノ岬遺跡出土遺物 (3)



## なかちくや 5. 中竹矢遺跡 I 区

中竹矢遺跡は、北側の丘陵部と南側の水田部に分け、今年度は水田部の調査を行い、これを中竹矢遺跡 I 区とし、さらに I 区のうち漸定道路工事部分（幅14m）を A 区、進入道路部分を B 区として発掘調査を実施した。

調査は、重機により耕作土約30cmを除去した段階で精査したが、暗青灰色粘土層から出雲國分尼寺と同時代の遺物は出土したもののが当初予想された出雲國分尼寺関係の遺構は検出されなかった。そのため、さらに暗青灰色粘土層約20cmを除去したところ、山瓶の灰色粘土層から弥生土器、古式土師器などが出土したため、精査すると灰白色粘土層に掘り込んだ土壙が確認された。調査が進むにつれ、土壙は複雑に切り合っており、土壙の壁の崩れているものが多く、そのため理解に苦しむことも多々あった。さらに、A 区西側にも土壙の存在することが考えられたため、進入道路部分を拡張した（B 区）ところ、南北に走る溝状遺構が検出された。この溝状遺構より西方は、淡青灰色砂礫層となり、灰白色粘土層はなく、また、土壙も検出しえなかった。

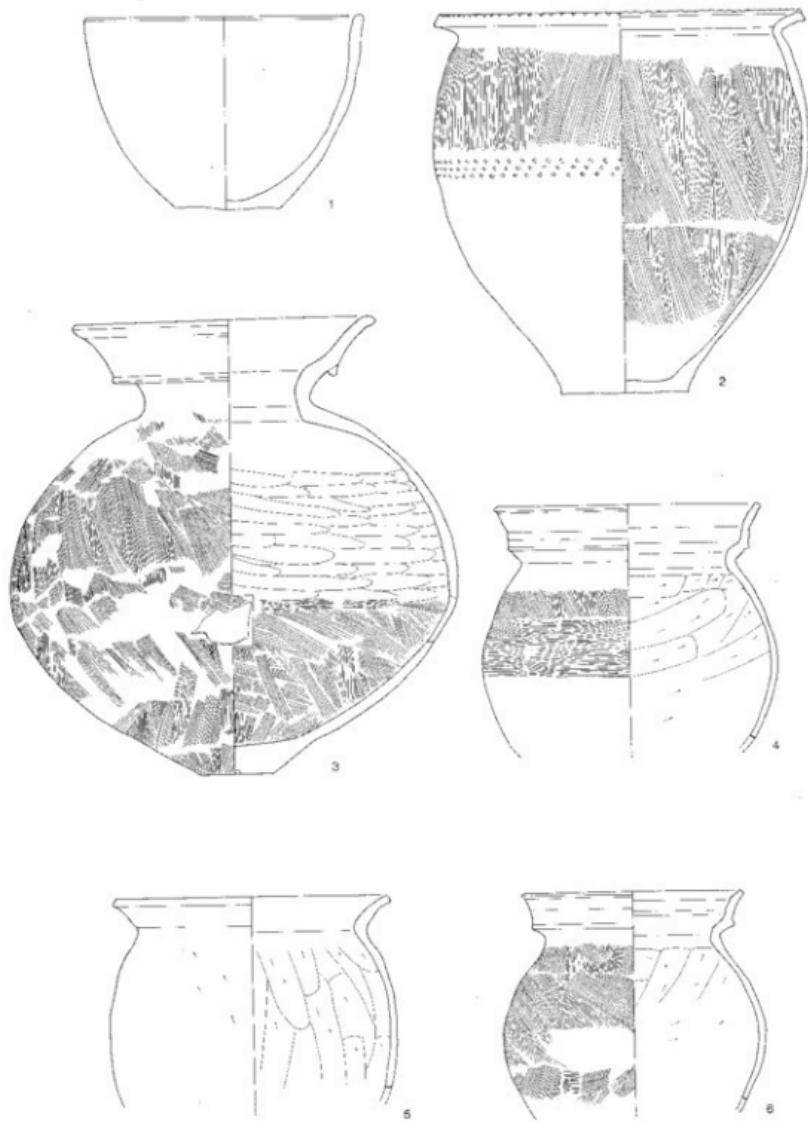
### 1. 遺跡の範囲と遺構

発掘調査の結果、遺跡の範囲は以下のように考えられる。B 区で検出した溝状遺構がこの遺跡の西側の境界をなし、また、丘陵根から約30m南にある東西方向の水路付近が南側の境界をなしているものと思われる。B 区では、溝状遺構の東側には灰白色粘土層に土壙が掘られているのに対し、西側は、淡青灰色砂礫層で土壙も検出されていない。また、南側の水路以南でも B 区の溝状遺構以西と同様に淡青灰色砂礫層となっており遺構は存在しない。以上のことから、中竹矢遺跡 I 区は西側は溝状遺構で、南側は上記の水路付近にそれぞれ遺跡の境界があるものと考えられる。

検出された遺構は、A 区では弥生時代前期から占墳時代前期にかけて作られた土壙 193、B 区では土壙 3、溝状遺構 1 である。

(1) 土壙 A 区 193、B 区 3 の計 196 の土壙を検出しえた。これらの土壙は、灰白色粘土層に掘り込んだもので、最小が 53cm × 47cm (SK 174)、最大が 193cm × 155cm (SK 177) を測るが、大多数は、長径で 100cm から 150cm、短径で 60cm から 100cm の範囲内の土壙である。また、深さは、確認面から 30cm から 50cm の土壙がほとんどである。その平面形は、長方形、円形を示す土壙は約 1 割にすぎず、他の土壙は不整形である。底面も半らというより、凸凹をもつものが多く検出された。これらの土壙は、そのほとんどが互いに複雑に切り合っている。全体の半数以上の土壙から土器、木製品、木、石などの遺物が検出されたが、それらはほとんどが土壙内では浮いた状態で出土しており、平面的にも分布の方向性はみられない。

(2) 溝状遺構 B 区中央で、南北方向に幅約 5.8m、深さ約 40cm の溝状遺構を検出した。この溝状遺構は、底がやや荒い砂礫層となっている。

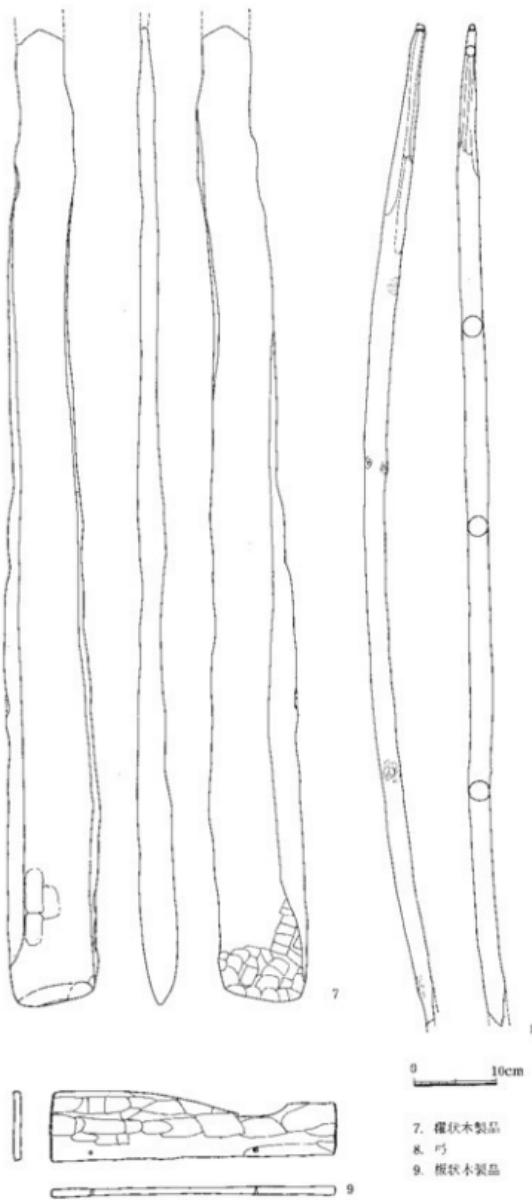


第10図 中竹矢遺跡Ⅰ区土塙内出土土器

0 10cm

番号	器種	出土地点	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	備考
1	鉢	SK 09	口径 13.4 底径 6.9 高さ 12.9	しっかりした平底から胴部は内湾して伸び口縁部に至る。口縁部はやや角張り、わずかに平坦になる。	口縁、胴部外面、上半、内面全面へラ磨き、胴部下半、底部外面、指によるナデ。	焼成 良好 胎土 小白色砂粒含む 色調 黒灰色
2	甕	SK 142	口径 24.0 底径 8.5 高さ 25.1 最大径 25	しっかりした平底から胴部は内湾して伸び、口縁部は「く」の字に外反し、端部は肥厚する。口縁端部にヘラによる刻み目、胴部最大径付近にクレシによる刺文。	底部ナデ。 胴部外面上半はハケ目、下半は輪方向のラ磨き、内面ハケ目、口縁部内外面ヨコナデ。	焼成 良好 胎土 砂粒ほとんど含まない 色調 灰黄色
3	壺	SK 23	口径 20.0 底径 4.8 高さ 30.3 最大径 29.5	小さいがしっかりした平底から、胴部は強く張る。口縁部は複合口縁で大きく外反する。	底部外面ハケ目。底部外面、胴部内面下半、外面ハケ目。胴部内面上半指によるケズリ。口縁部ヨコナデ、凸部は貼り付け。	焼成 良好 胎土 小砂粒多く含む 色調 白黄褐色 胴部に焼成後に穿孔
4	甕	SK 45	口径 17.3 現存高 15.6 最大径 19.7	肩部はなだらかで、胴部は球形をなす。口縁部は複合口縁をなし外反し端部は平坦になる。	胴部外面ハケ目、内面ヘラ削り。口縁部ヨコナデ。	焼成 良好 胎土 砂粒を多く含む 色調 黒色(炭化物付着)
5	甕	SK 45	口径 17.9 現存高 12.8 最大径 19.0	肩部はなだらかであまり張らない。口縁部は「く」の字に外反し、端部はやや肥厚し平坦になる。	胴部内外面ヘラ削り。口縁部ヨコナデ。	焼成 良好 胎土 小砂粒を多く含む 色調 黑色(炭化物付着)
6	甕	SK 30	口径 14.8 現存高 13.6 最大径 17.6	肩部はなだらかで、胴部は球形をなす。口縁部は複合口縁をなし、外反し端部は平坦になる。	胴部外面ハケ目、内面ヘラ削り。口縁部ヨコナデ。	焼成 良好 胎土 植小砂粒含む 色調 黑色
7	縦状木製品	SK 114	現存高 158.4 幅 5.6~10 厚さ 0.8~4.4	先端が粗広くなり、ついでに加工する。全体に扁平である。	表面を削る。	
8	丸木弓	SK 164	現存長 121.2 径 2.6	丸木をそのまま利用し、木丸に弓巻を作り出す。	弓巻近くを削る。	
9	板状木製品	SK 42	長さ 30.4 幅 8.4 厚さ 0.8	方形の薄い板で、一辺は「く」状の折りを入れる。角に方形の穴があり、釘穴かと思われる。	表面とも削り。	

中竹矢遺跡 I 区出土遺物観察表



## 2. 出土遺物（図版8・9）

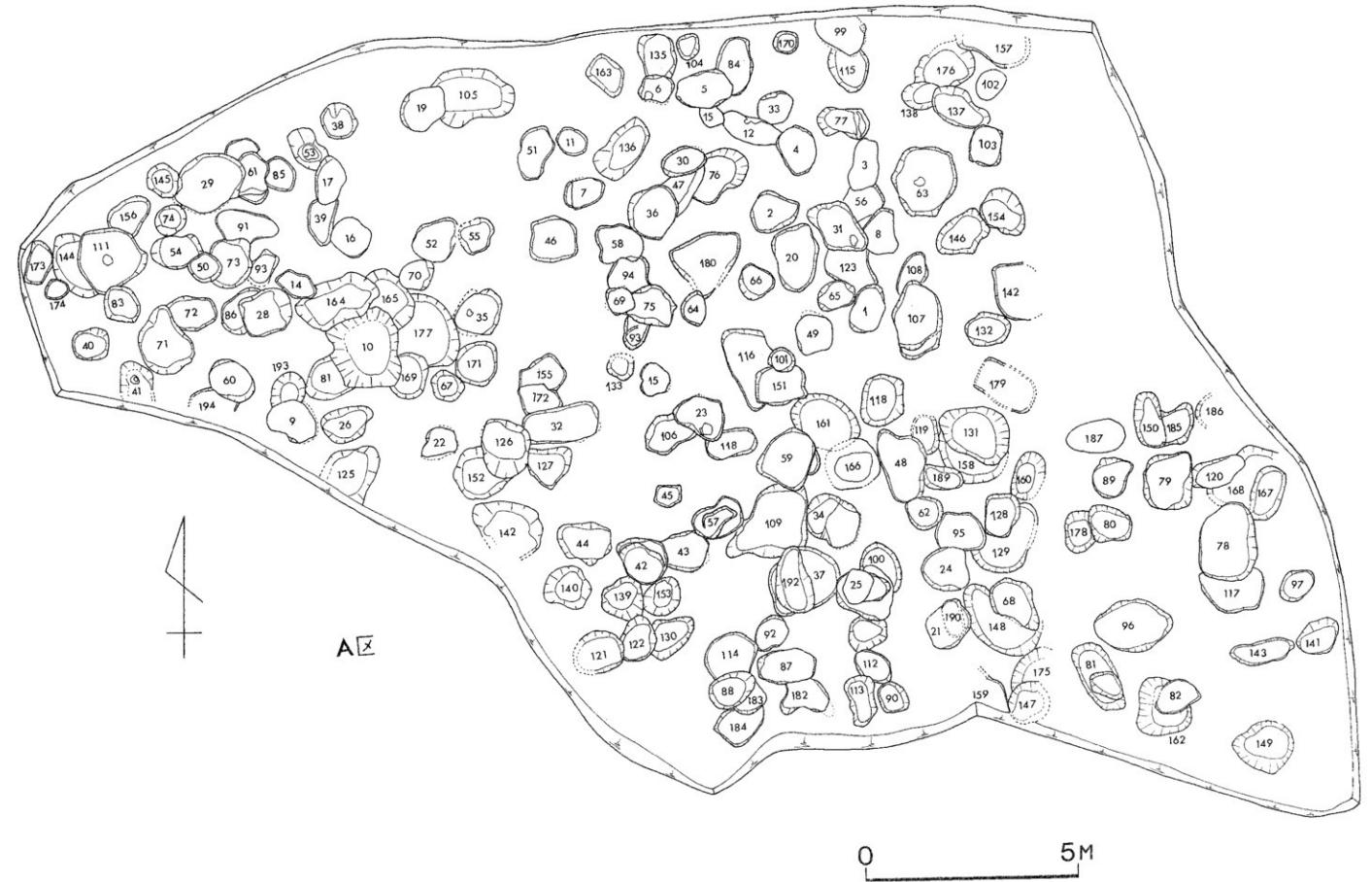
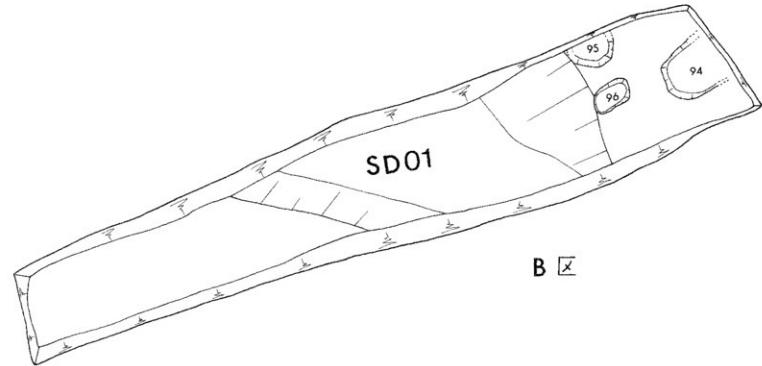
暗青灰色粘土層出土遺物

須恵器、瓦、土師器など出土  
数は多い。山際に近いほど多  
く出土すること、レベルがま  
ちまちであることや出土遺物  
から出雲國分尼寺跡、同瓦窯  
跡からの流れ込みと思われる。

土壤内の遺物 土壌内から  
は弥生時代前・中・後期、古  
墳時代前半の土器や、鉢、鏡、  
丸木弓、櫛状木製品、杭状木製  
品、板状木製品などの木製品  
が出土した。現在整理中であ  
るため全てを把握していない  
が、上器は弥生時代中期のも  
のと古墳時代前期のもの多  
いようである。

（柳浦俊一、園山和男）

第11図 中竹矢遺跡I区出土木製品



第12図 中竹矢遺跡遺構配置図

## 6. 布田遺跡

### I 発掘調査

事前の試掘調査で、バイパス予定地内の長さ約450mにわたって土器の出土が確認できており、遺跡の範囲もほぼこれに一致するものと考えられる。今年度はバイパス予定地内を大きく6区に区分し、中央部のII～IV区について発掘調査を行った。この地区的層序は、II・III区とIV区でわずかに異なっている。第8試掘溝では第I層（耕作土）、第II層（赤褐色土）、第III層（暗赤色粘土）、第IV層（黄灰色粘土）、第V層（暗灰色粘土）、第VI層（灰白色砂）となっている。第III～V層は同質の粘土層で、第III・V層上面にそれぞれ砂がかんでいる。第9試掘溝では、第II層（黄褐色土）、第III層（赤褐色土）、第IV層（茶褐色土）、第V層（灰白色砂）となっており、III区の第III～Vの粘土層が消滅したかわりに、赤褐色土層の上下に新たにそれとほぼ同質の土層の堆積が認められ、南に向かうにつれ、それも薄くなって砂の堆積が厚くなる傾向がある。第8試掘溝で確認された落ち込みは、SD11（古墳時代）、SD12（弥生時代）の溝で、第9では土壤状のピットであった。

調査区全域にわたって圃場整備を受けており、第II層上面はほぼ水平に削り取られていて從来の状態を留めていない。從って遺構は第II層上面で確認されるが、いずれも上部が消滅している。なお遺構が認められたのはIII～IV区にわたってであり、II B区以北では検出できず、包含層だけであった。

### II 遺構

遺構は弥生時代以降の溝、住居跡、掘立柱建物跡などが確認されている。以下に特にIII区の遺構について述べることにする。

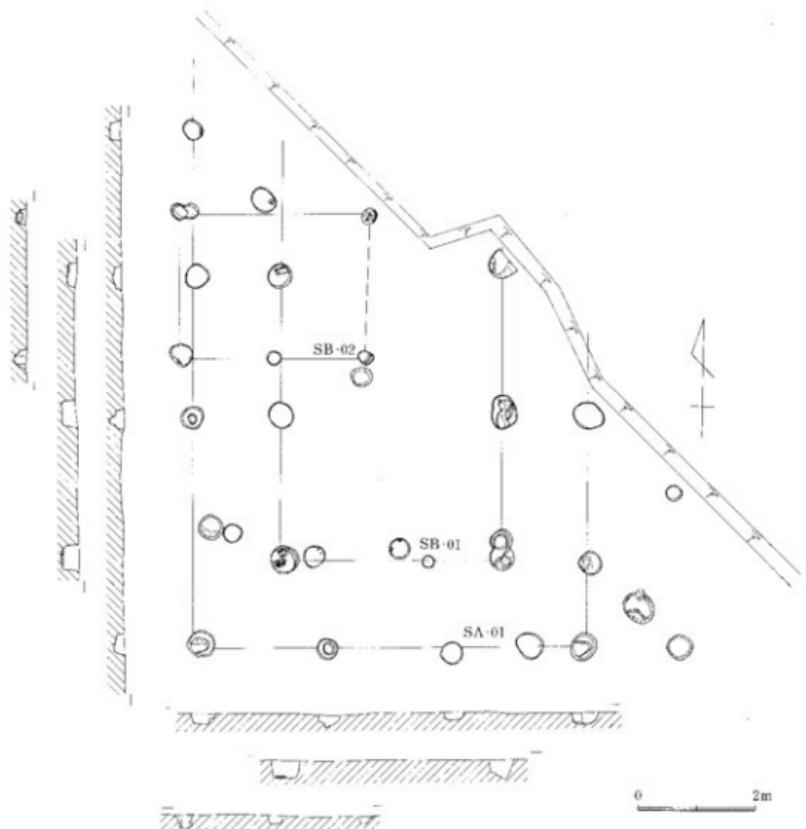
#### (1) 掘立柱建物（第13図）

SB01 III区第II層上面から、SD09～10の埋土の上面で確認された。長軸の方位はほぼ真北に一致している。北端は調査区外に伸びており、規模は2間（376m）×3間（2間分480cm）である。柱穴はいずれも円形でP4、P8、P10にはそれぞれ板が敷いてある。

SB02 SB01に重なるような状態で検出された。長軸の方位は東西に向いている。規模は1間（244m）×2間（318m）でかなり小さい。柱穴は直径22cm～38cm程度で、深さもさほどない。上部が削り取られていると思われ、P1内の石材がすぐ現れている。この石は自然石で上面が平坦になっている。

SA01、SB01の外側を巡るように柱穴が10個検出された。東西両側の柱穴はSB01の柱穴にはほぼ対応し、それとの間隔は148cmである。検出された柱列の規模は西側で4間（880cm）、南側で3間（764cm）、東側で2間（400cm）である。柱穴は直径ほぼ40cm程度の円形で、深さは約20cmである。P8の断面でみると柱根の太さは約15cmである。

掘立柱建物の柱穴からは、土器片がわずかに出土しているが、いずれも細片である。弥生土器片のようであるが、柱穴の掘り込まれたところは、弥生時代中期の溝（SD09～10）の覆土にあたるため、



第13図 布田遺跡振立柱建物跡

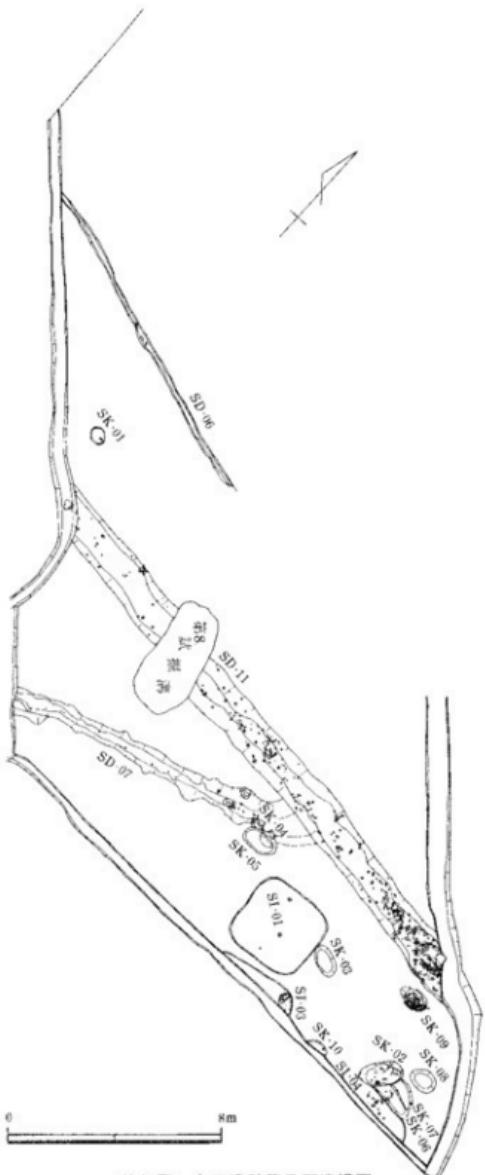
弥生土器は溝に関係するものであろう。いずれにしてもこれらの建物は弥生時代中期を大きく下る時期のものである。

その他にⅢ区南側でも柱穴群が発見されており、その数は70個を越え、7～8棟の家屋が存在したことが予想される。この柱穴群は古墳時代の溝（SD11、5世紀末～6世紀）の上にかかっているところから、古墳時代以降のものと考えられる。

## (2) 溝（第14図）

Ⅲ区では弥生時代中期と古墳時代の2時期のものが、溝状遺構をも含めて12本検出された。

SD 06 幅24～28cm、深さ9～14cmでN-70°Wに向いている。断面はほぼ半円形を呈し、全体的に整っている。Ⅲ区中央部以東では検出が不可能であった。この溝の掘り込まれた部分にも住居跡状



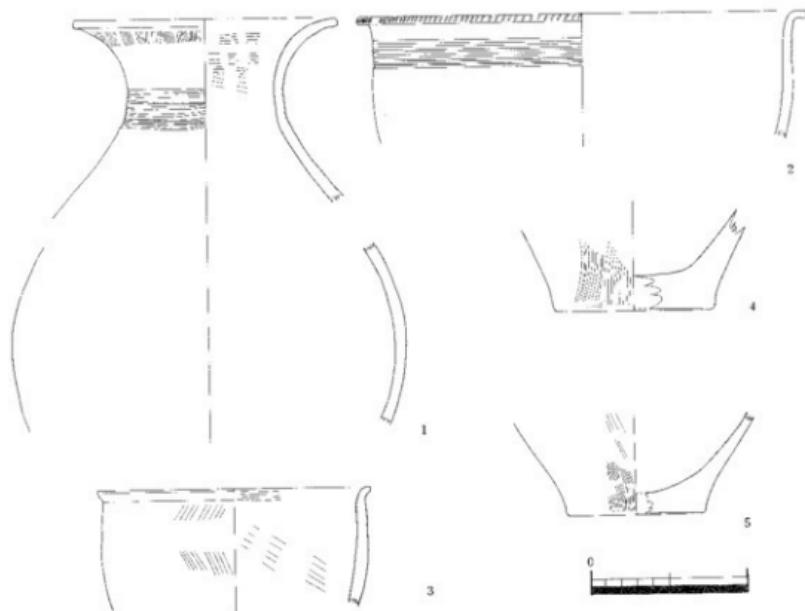
第14図 布田遺跡第III区遺構図

の遺構があるところから、それとの関係が強いと思われる。

SD07 西側で約70cm、東側で約130cmの幅があり、深さは約10cmである。西端ではわずかながら南に湾曲する傾向があり、東端はSD12に合流している。溝内には砂が堆積しており、粗細2層に分かれている。

SD08~10 3本の溝がII C区からIII区にかけて平行して走っており、南にやや湾曲した状態で検出された。08と09は幅60~80cm、10は300~330cmある。前者は浅く遺物の量も少ないが、後者は二段に掘り込まれており、最も深いところで約50cmある。全体に東に向けて徐々に深くなっている。SD10からは遺物が多量に出土しており、溝の段上にあるものと、最深部にたまっているものとに分けることができる。III区東半部で3本の溝はつながっており、発掘時もこの部分だけ堆積土が他と異なっていたが、特に別の遺構を検出するまでにはいたらなかった。いずれの溝も2層の堆積が認められ、上層には灰褐色の砂質土・下層には灰色の粘土が厚く堆積していた。

SD11 唯一古墳時代の溝である。SD12と重複しており、溝の下面を追うのはかなり困難であった。幅約140cm、深さ30~40cmで



第15図 布田遺跡S-104出土遺物

あり、赤褐色土層上面から黄灰色粘土まで達している。底面から遺物が多量に出土する。

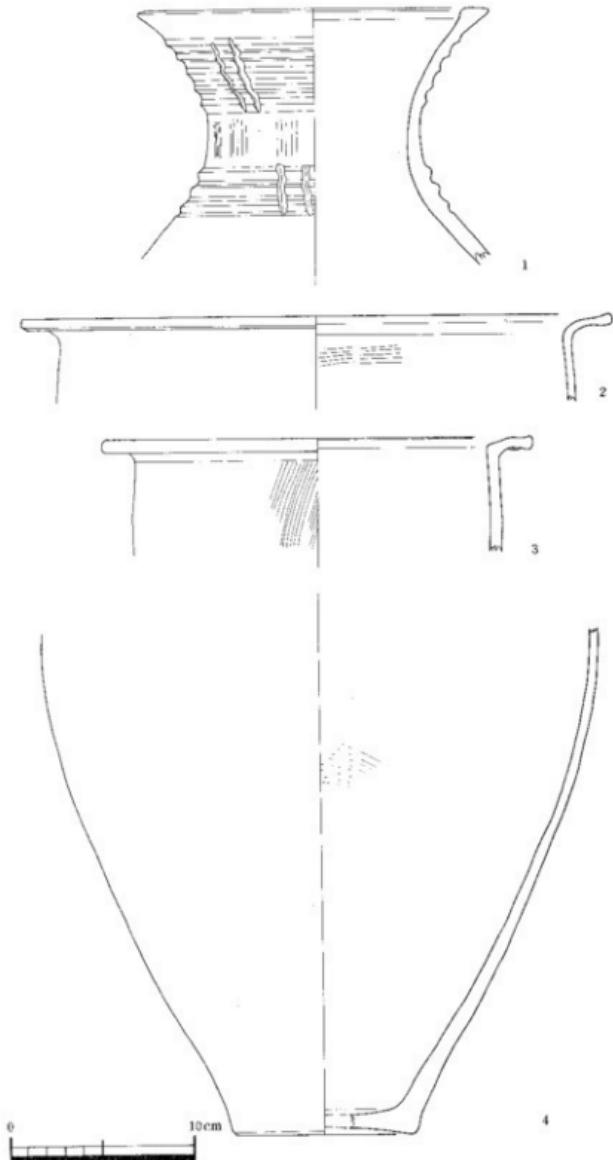
S D 12 幅約200cmで東端では300cm程度まで広がっている。北側に幅約30cm、深さ30cmの細い溝があり、その南で一度高くなつたのち再び深く、そして幅広く掘り込まれている。上部をS D 11によつて切られているため、浅いところではほとんど底面が残っていないが、赤褐色の粗い砂が堆積している。遺物もS D 11内の土器などと臥在した状態で出土している。溝の中央部で南側を走るS D 07が合流しており、溝内の遺物もほぼ同時期のものであることから、S D 12と07が同一時期の溝であると考えられる。

### (3) 土壙(第14図)

Ⅲ区南端で現在16個検出されており、遺物のはいっているものは8個ある。その内特に遺物の残りがよく、時期の判るものとしてSK01、02、09があげられる。

SK01 Ⅲ区東端S D 07とS D 11の間で検出された。長径66cm、短径55cmの楕円形で深さは約19cmであり、下面は暗赤色の粘土層まで掘り込まれている。土壤内は3層に分離でき、下層は1~5cmの円礫と粗い砂で構成されている。これは、土壤を掘り込んだらち内礫を敷きつめたものと考えられる。下層の上面から中層にかけて、弥生時代後期の菱形土器が埋まっていた。

SK02 長径166cm、短径88cmの楕円形に掘り込まれており、深さは約18cmである。下部約10cmは



第16図 布田遺跡SK 09出土遺物

どに炭化物混じりの灰層があり、焼却後の灰を捨てたものらしい。

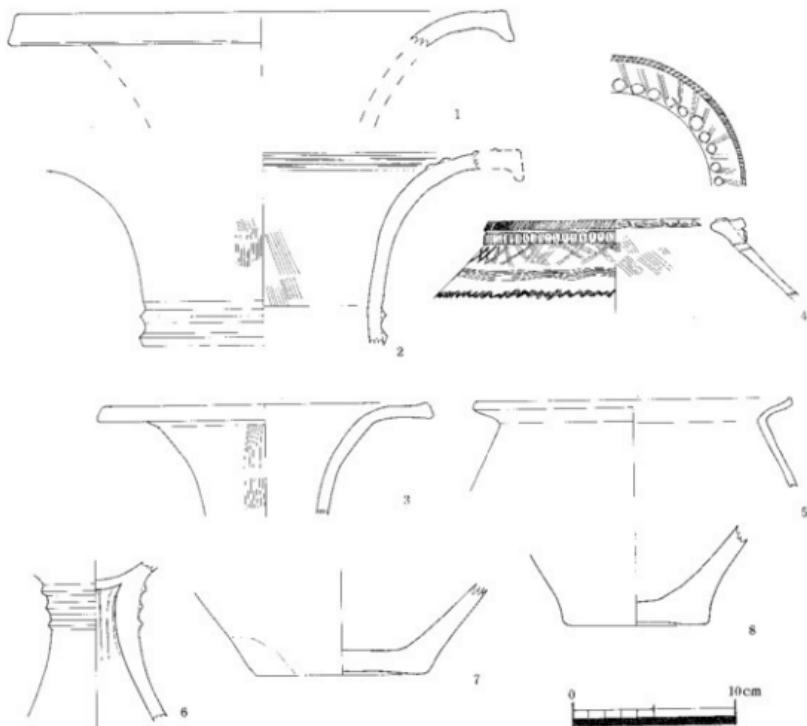
SK09 耕作土を除去した段階で土器が集中して出土していたが、遺構は確認できなかった。土器を取り上げたのち、それが土壤内の遺物であることがわかった。それによると、長径120cm、短径72cmの楕円形の土壙で、土器は南側にかたまって出土している。もちろん上部を削り取られており、土器の下はすぐ底面である。

#### (4) 住居跡

(第14図)

南端で堅穴式住居跡が検出された。SI 04には土器を伴っている。

SI 01~02 1辺296cmの隅丸方形の小形住居跡である。SI 01を完



第17図 布田遺跡SD 10出土遺物

掘したが、遺物はなく、住居内に柱状ピットは2個しか検出できなかった。住居の四隅の外側に、内側で検出された柱状ピットとほぼ同規模の柱穴が各1個ずつ見つかっているが、これがSI 01に伴うかどうかは不明である。またSI 02にも遺物は全くはないおらず、柱穴も検出できていない。

**SI 04** Ⅲ区の東南隅で検出された。一部しか現われていないが、ほぼ一辺360cmの隅丸方形の住居跡らしく、土器が北壁付近に集中して出土した。土壤と切り合っており、SK02→SI 04→SK06の変化が追える。また、古墳時代の土壤も住居跡内に掘り込まれており、この付近は遺構が複雑に重なり合っている。

### Ⅲ 遺物

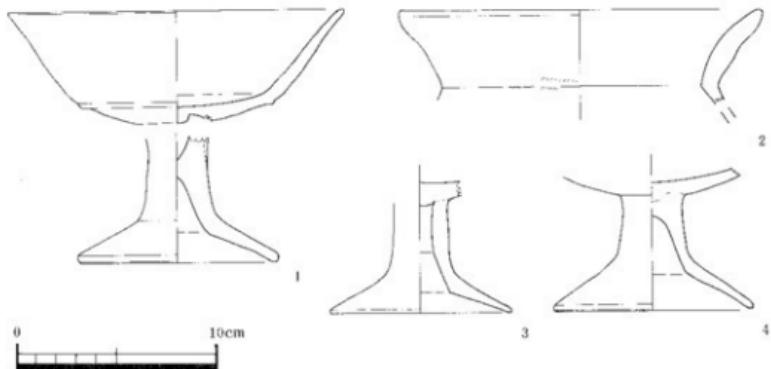
SD 10から多量の遺物が出土するのをはじめとし、各遺構に遺物が伴っている。ここでは、遺構ごとに代表的な遺物を紹介することにしたい。

**SI 04** (第15図) 壺形土器と甕形土器および底部片が出土する。1は壺形土器の口縁部である。口縁部は漏斗状に大きく外反し、太くて短い頸部には対描きの沈線が8条走っている。頸部は欠損す

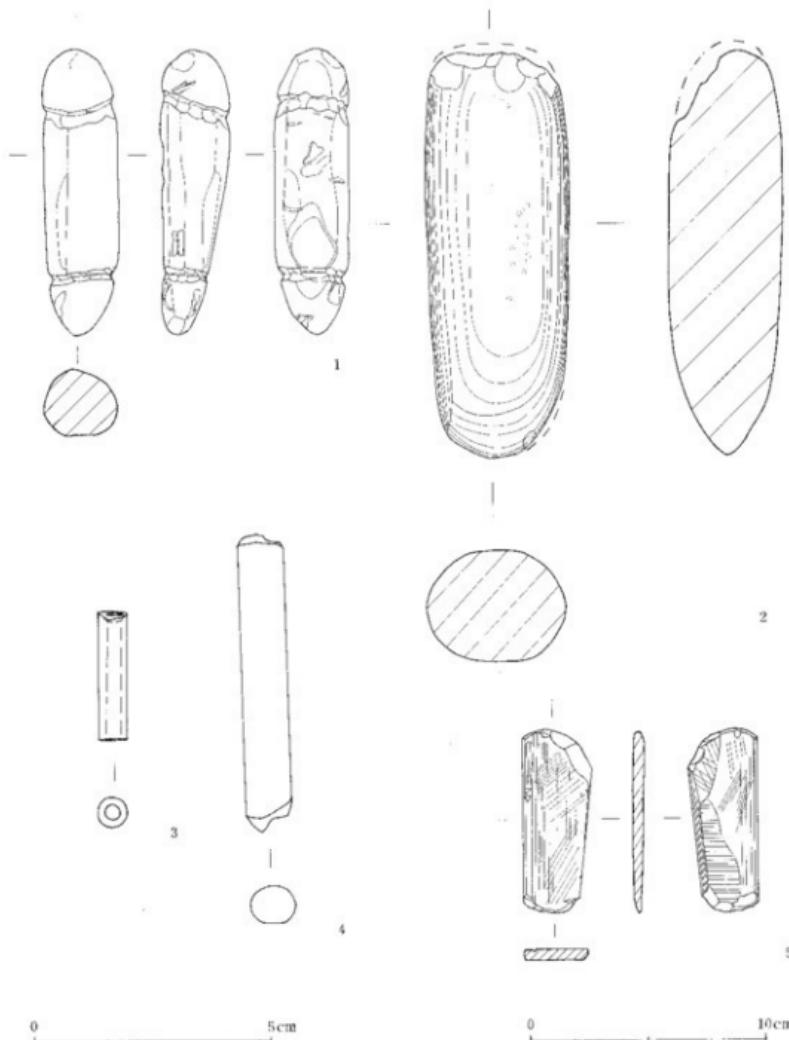
るが、わずかに刷が張りつつも、全体的にははっそりとした器形になるものと思われる。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目調整を施したのち、それぞれナデ消している。2は壺形土器の口縁部片で、逆L字状に強く屈曲した口縁を持ち、口唇部には細かな刻目が施されている。胸部は口縁部からほぼ垂直においており、外面口縁下には篦描きの沈線が6条巡っている。内外ともに縦方向の刷毛目調整後、横方向にていねいなナデを加えている。3は口縁部をわずかに外反させた壺形土器である。内外面ともに斜行の刷毛目調整を施したのち、ナデしている。4は厚手の底部片である。やや薄めの底面に粘土を貼り付け、胸部下端も厚く粘土を貼り付けて補強している。外面は刷毛でかき上げたのち、さらにナデで整えている。内面はナデ調整である。わずかながら上げ底である。5は底部片であるが4よりも薄く平底である。外面は細かな刷毛目調整、内面はナデが施されている。以上の土器は、弥生時代前期末～中期初頭のものと思われる。

SK09(第16図) 壺形土器と壺形土器が出土する。1は壺形土器であるが、口縁部は直線的に立ち上がり漏斗状に開いている。口縁端は肥厚させて、端部に広い平坦部をつくる。口縁下と肩部にそれぞれ5条と3条の隆起帯をつくり、それに直交させる形で縦に2本の突帯を貼り付けている。頸部から肩部にかけての屈曲から胸部はかなり張ることが予想される。表面の剥脱が著しいため、調整は明瞭でないがていねいなナデと思われる。2は壺形土器の口縁部である。くの字形に外反させ端部をわずかにはね上げている。胸部はさほど張らないものと思われる。内外面ともにナデ調整である。3も同様の口縁であるが口縁端に面取りを行なっており、はね上げの度合も強い。内外面ともに刷毛目調整のちていねいなナデ調整を施している。4は口縁部を欠いた壺の胸部である。やや上げ底の底部から直線的に立ち上がるが、胸部上半は張りが強い。内外面ともに刷毛目調整後、ナデしている。

壺形土器は、松江市タテショウ遺跡から類似した土器が出土している。タテショウの報告書では、横方向の隆帯に縦に2本の粘土糸を貼り付ける手法を弥生時代中葉の特徴としているが、器形に関し



第18図 布田遺跡SD II出土遺物



第19図 布田遺跡出土遺物

ては後葉的な要素をそなえているといえる。壺形土器はどちらもくの字形のはね上げ口縁で中期中葉の特徴をしっかり示しており、壺形土器もほぼこの時期に相当すると考えられる。

S D08～10（第17図）などの溝からも同様の土器が出土する。特に S D10からは、弥生中期の土器が多量に出土している。1～3は壺形土器の口縁部である。1は朝顔形に大きく開いた口縁で先端部

は欠損するが、内面に2条の突帯を貼り巡らしている。外面頸部にも2条の突帯が巡らせてある。内外面ともに縦方向の刷毛目調整後、ていねいにナデている。2は同様に大きく開いた口縁であるが、口縁端を垂らして広い平坦面を作っている。内外面に文様はなく、ナデによる調整である。3は円筒形の頸部から瓶斗状に強く開く口縁で、口縁端はわずかに肥厚するのみである。やはり文様はなく、刷毛目調整後ていねいにナデしている。4は無頸壺の口縁である。丸い肩部から内向しながら立ち上がり、口縁部は突帯状の粘土紐を貼り付けて、強く屈曲した形をつくり出している。口縁端には、刻み目が施されており、口縁下に突帯を貼り付けたのち、強めの刺突を行っている。口縁上面および肩部に櫛描きの斜格子状沈線がはいっており、口縁上面にはさらに円形の貼付文が細かく加えられている。5はくの字形口縁の壺形土器で、頸部に強い稜線を持ち、口縁端は上に向ってはね上げている。内外面ともに横方向の刷毛目調整後、ていねいにナデしている。SD10からはこの器形の壺形土器が多く出土する。底部はいずれも平底でわずかに上昇して底になっている。底部片の出土が最も多い。その他、高坏、ミニチュア土器などの破片も出土している。壺、甕の器形や文様などからSD10の遺物は、弥生時代中期中葉の所産と考えられる。

SD11（第18図） 古墳時代の遺物が出土している。1は土師器高坏で坏下半部は浅く、上半部はやや内湾しながら開き、端部をわずかに外反させている。坏屈曲部は外側に段を有している。脚柱部はほぼ円筒形をなし、内面はへラ削りである。脚裾部は大きく開き端部をていねいに面取りしている。内外面ともに縦方向の刷毛目調整後、ていねいにナデ仕上げである。SD11からは高坏が多数出土する。2は壺形土器の口縁部で、頸部からゆるやかに外反している。頸の屈曲部は鋭い稜がたっている。内面は横方に、外面は屈曲部以下に縦方向の刷毛目調整のち、ナデが施されている。須恵器は大形の壺の破片のみである。高坏の形態から、いわゆる大束式の時期に相当すると考えられる。

土器の他に石器、石製品も出土している。石器には石鉋、石斧、石庖丁、石鑿、石鎌、敲石、砥石、彫器などがある。石鉋はSD08～10などに出土している。いずれも無茎で弥生時代のものにすればやや小形である。風磨石、安山岩系の石材を用いる場合が多い。石斧はSD09～10から打製・磨製の両方が出土している（第19図2）。石製品としては菅玉や男根状石製品が出土している。菅玉はSD06から中期中葉の壺形土器とともに1個出土している。緑色凝灰岩製で長さ14mm、直徑3.5mmで断面円形である。穿孔は両側から行われており、表面はよく研磨されている（同図3）。菅玉の未成品が3点出土している。いずれも緑色凝灰岩製である。同図4は風化が著しく表面は灰緑色に変色している。長さ31.8mm、直徑5mmで断面はほぼ円形であるが、一部に平坦面が残っている。穿孔は行われておらず、磨耗が著しい。両端部はわずかに欠損していると思われる。その他の2点は、SD10、SD12から各1点ずつ出土している。菅玉未成品に関連して、布田遺跡からその石材の緑色凝灰岩片が多数出土している点が注目される。第19図5は、IVB区から出土したものであるが、長さ7.7cm、幅2.4～2.9cm、厚さ0.5cmの板状の石材に縦方向に細い溝が走っており、菅玉をつくる過程を示す好資料である。このような溝のはいった板状の石材はその他に何点も発見されており、遺物を整理する

ことによって玉造りの工程が明らかになるかもしれない。その他にⅢ区SD06付近で多数のチップ、フレイク類が出土している。現在総数260点を数え、石器の工房跡の可能性もある。石材はめのうなどが多い。

一風変わった遺物では、ⅡA区耕作土下面から男根状石製品が出土している。砂岩質の脆い石材に切り込みを入れ、基部に近い方を溝の底から斜めに削り取って、明確な亀頭部をつくり出している。反対側はやや細くなっているが同様に溝を巡らしている。亀頭部側がていねいなつくりをしているのに対して、こちらは粗雑で、あるいは縦などをかけて使用したのかもしれない。断面不定円形の自然石を用い、亀頭部は厚さ2.7cm、基部はやや扁平で1.8cmである。長さは12.0cmを計る。

#### VI まとめ

以上のように布田遺跡は、弥生時代中期の溝を中心として、掘立柱建物、弥生時代の土塙、住居跡、古墳時代の溝などで構成された複合遺跡である。遺跡の性格は、集落跡と考えられ、弥生時代前期末～中期、後期さらに古墳時代（5C末～6C）に営まれたことが理解される。調査区を東西に走るSD08～10は調査区東方では検出されなかったことから、南へ曲っているものと予想される。このことから、この溝は環濠的性格を持つものと思われ、住居跡なども溝の南側にのみ検出される。しかしながら集落の中心はさらに南および西方にあると考えられ、SD10の遺物も廃棄されたものと考えられる。

布田遺跡は意宇平野の中央部に位置し、島根県内では不明確であった平地の集落の様子を知ることができ、また、各遺構に伴う遺物にも時間的な幅があるところから、同じ地区内の集落の変遷を知る上で一つの手掛りを得ることができた。しかし今年度調査では、その調査範囲も少なく今後の調査に期待するところが大きい。

その他、特に注目される点は、管玉などの未成品や石材などを多数出土する点で、あるいは玉造りを行ったことも予想され、今後工房や攻玉工具、さらには玉作りの工程を示す石材などの発見が課題となろう。

（足立克己）

## 7. 夫敷遺跡

夫敷遺跡の調査は、第1調査区に設けたNo.18グリッドの土壤分析から始めた。このNo.18グリッドの北壁で、表上から第7層まで柱状に土壤をサンプリングし、宮崎大学の藤原宏志助教授にプラント・オパール分析を依頼した。その結果、7層から成っていた層順のうち、第6層に全国の他の水田遺跡の分析結果にみられるような、イネのプラント・オパールのピークが認められ、水田跡の存在が指摘された（プラント・オパールおよびその分析結果については別稿に報告）。このときには、まだ夫敷遺跡の範囲内では遺構の確認はできておらず、土器片數十点が採取されていたにすぎなかった。

そこで、夫敷遺跡の調査開始にあたっては、藤原助教授の現地での直接指導により、バックホーで幅1.5m、深さ2mのトレーニチを、発掘範囲の東側に約90mにわたって掘削した。これは、水田の畦畔の間隔を考えたとき、長さの短いトレーニチの壁面では、トレーニチ内に畦畔の断面が出ないことが予想されるために、長いトレーニチの壁面で幾条かの畦畔の断面を検出し、それを水田面確認の手がかりにするためであった。

10月初旬にそのトレーニチを掘削したが、その日に第II調査区の北側に第6層の黄灰色粘土層で畦畔と思われる高まりとそれに平行して走る溝の断面をみつけることができた。第5層が幾分粘土分を含むものの砂層になっているために、第6層との区分がしやすいことも検出を容易にした。

この第6層の畦畔の断面が明らかになったことで、プラント・オパール分析による第6層に水田跡の可能性有という報告結果とは大方において合致するものと考えられたが、これから後は、層序にしたがって平面で水田の広がりを捉らえるという、いわば分析結果との照合という形で発掘調査を実施した。

### 水田遺構

水田遺構は夫敷遺跡第II調査区と名付けた幅14m、長さ90mにおよぶ範囲内で、2時期のものを上、下2層で検出できた。

#### (1) 第4層の水田遺構(第20図)

この第4層は暗灰色の粘土層で、水田面はプラント・オパール分析では明確に捉えられていないものである。この層では、調査区内に、明確な水田区画1筆、推定復元できるもの16筆、合計17筆が確認できている。

大きさは最大で一辺7.5m、小さいもの5m×3mであり、一辺5mぐらいのものが多い。

畦畔の幅は40cmから1m程度あり、高さは5cmばかりである。畦畔には、木杭を打つとかといったものではなく、水田耕土と畦畔の土質は同じである。また、畦畔の南北軸は磁北にはば等しい。

この第4層では、水利を示すような取水口など水田の構造に関するような遺構は発見できなかった。

出土遺物は、第II調査区の北側に集中して弥生中期のものと思われる土器があった。しかし、細片が多くまだ未整理であるため詳細は省く。その他の遺物もない。

## (2) 第6層の水田遺構（第20図）

この第6層がプラント・オパール分析によって水田跡の可能性が指摘されていたことはすでに記した。黄色の粘土混じりの砂を平坦に削り取ると黄灰色粘土の畦畔の跡が浮かび出、砂層を完全に取り除くと水田面が出てくる。この第6層もやはり、畦畔と水田耕土とは同質の上であり、畦畔に矢板の列とかは認められない。

水田区画の規模は $5.5\text{ m} \times 5.2\text{ m}$ といったきわめて小さなものもあるが、一辺 $8\text{ m}$ ぐらいのものが主に検出されている。また、畦畔の方向や大きさも、第4層のものとほぼ同位置に、同一方向に伸びており、共通性が認められる。

現段階では、調査区の北側に東西に走る溝の性格など、第6層の水田遺構については全般にわたって検出していないため、正確な様相は述べることができず、出土土器についても詳細は本報告にゆずることにする。

以上述べたように調査は第6層の水田跡を検出し終えたところであり、いまのところその事細かな分析までには至っていない。ただプラント・オパール分析によって水田跡の可能性が指摘され、それが発掘のうえからも実証されたことをまず記しておく。だが、このことからは、調査者に対して多くの問題点が提起されたことも明らかである。

### (1) 水田の立地と範囲

夫敷遺跡の北端には舟底という地名が残るように旧河道を示す低地がある。遺跡はこの旧河道沿いの自然堤防上に営なまれた可能性がある。東西への広がりはバイパスのルート内 $60\text{ m}$ という限定があるため押さえることができない。あとは南へどれだけ伸展していたのか、それを確認する必要がある。立地等がいくらくらでも明らかになれば水利面での関係を知ることができよう。

### (2) 水田構造

今回の畦畔は土を盛ったもので、作りそのものは簡単である。だが、水田であれば、取水口をはじめ溉漑用施設など考えられる。今後、そのような諸施設が明らかにできるかどうか。

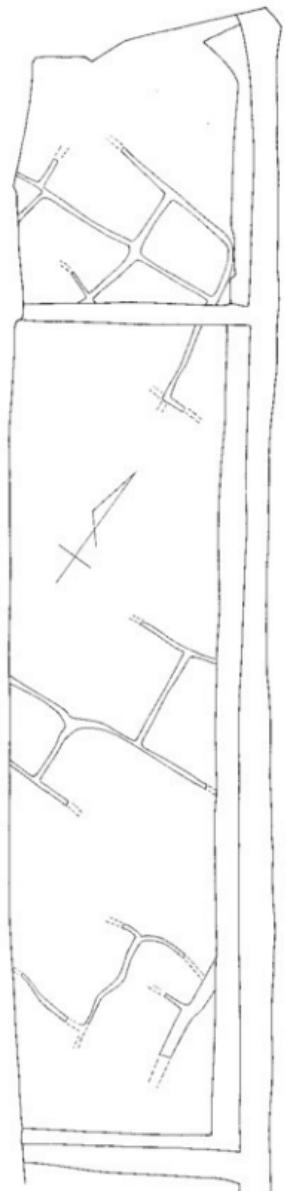
### (3) 条里制との関係

意字平野には現在もなお、条里制が一部に残っている。この弥生期の水田址と後代の条里制との間になんらかの関連性があるのかないのか。

時間的にもまた範囲的にも限りのある調査のため、どの程度できるか不安はあるが今後の整理および調査で解明したい。

（平野 労英）

第4層水田跡



第6層水田跡



0 10m

第20図 夫敷遺跡水田遺構

## 夫敷遺跡におけるプラント・オパール分析

宮崎大学農学部 藤原 宏志

最近数年間、各地の遺跡で古代水田が発見され古代水田耕作の様子が具体的に明らかになりつつある。従来、弥生時代の水田跡といえば静岡：登呂遺跡にみられる大型・方形水田を想定するのが通説であった。しかし、最近の水田跡発掘調査の成果は1区画：20～50 m<sup>2</sup>、不定形のものが一般的であり、登呂遺跡のような1区画：1,000 m<sup>2</sup>～2,000 m<sup>2</sup>という大型水田ではなく、むしろ例外的とさえいえることを示している。また各地方の古代水田はそれぞれの立地に対応して区画の大きさ、畦畔造成法、灌漑法に違いがあり多様性に富んでいる。

山陰地方ではまだ明確な古代水田跡の発掘例がなく、この地方における古代水田様式を考察する資料に欠けているのが現状である。

当該夫敷遺跡は意宇平野にあり、少なくとも弥生時代には水田耕作が営なまれていたと考えられる位置に立地している。本報告は当該遺跡で行なったプラント・オパール分析による古代水田跡の探索・確認に関する試みについて述べようとするものである。

### 1. 分析法および試料

#### (分析法)

プラント・オパール分析法は古代イネ科植物を探索、復元することを目的に開発された新しい植物分析法である。プラント・オパール定量分析法の確立により、古代水田跡の確認・検証およびその水田で生産されたイネの総量を推定することができるようになった。

当該遺跡では、特に新しい試みとして、水田遺構を検出する以前の試掘段階で土壤試料を採取・分析し、その結果から古代水田跡の位置・層位を知り発掘調査の便を計ることにした。なお、プラント・オパール定量分析法の手順を図に示した。同分析法の詳細については別の補報を参照いただければ幸いである。

#### (試料)

三次にわたる現地調査で多くの試料を採取・分析したが、ここでは'80年8月、夫敷遺跡18グリッドで採取した土壤試料の分析結果について述べることにする。

### 2. 分析結果(図版16)

分析結果は図に示した(第21図)。なお、この分析結果に示した土層はその後検討が加えられ第2層が二区分されたが分析時点ではまだ旧区分で扱わっていたため、そのまま旧区分の土層図で示した。

### 3. 考察および結論

- ① 試掘溝夫敷18グリッドより採取した土壤試料を分析した結果、第5層(新第6層)にイネ機動細胞プラント・オパールの顕著なピークが認められ同層が水田跡である可能性が強いことを示した。
- ② II区における発掘調査の結果、第3層(新4層)で弥生時代中期の水田遺構が検出された。試

掘調査における第3層の分析ではイネ機動細胞プラント・オパールが検出されず同層が水田跡であることを予測できなかった。この理由について次のことが考えられる。a、II区、第3層で水田跡が発見された地点と18グリッドは近接しているが同地点ではない。18グリッド近傍の発掘が進めば明らかになるが18グリッドの位置では第3層に水田跡が分布していないのではないか？ b、水田遺構が検出された部分の第3層試料を調べた結果（水田遺構検出後）イネ機動細胞プラント・オパールが検出された量的には少なく（ $3 \times 10^3$ 個/g）水田として活用された期間は短かったと考えられる。この程度の量であると試掘の段階で出たとしても水田跡として予測することは出来なかつたであろう。

③ 第3層、第5層（新4層、新6層）で発掘確認された水田跡は1区画：20～50m<sup>2</sup>の広さであり形も不定形である。畔群はほとんど残っておらず、その造成法を詳細に知ることは難しいが、わずかに残された畔群部の状態から、低い盛土法が用いられたと推定される。

この水田様式は岡山：百間川遺跡の様式と近似している。

④ 平面調査に先立ち、試掘溝で採取した土壤分析の結果から水田跡の位置・層位を探索する試みは第5層（新6層）水田跡を予知することができたので一応の成果を収めたものと判断してよからう。プラント・オパール定量分析により、水田遺構の探索が可能であることを実証する結果であり、今後他の遺跡における水田遺構調査に応用できる見通しが得られた。

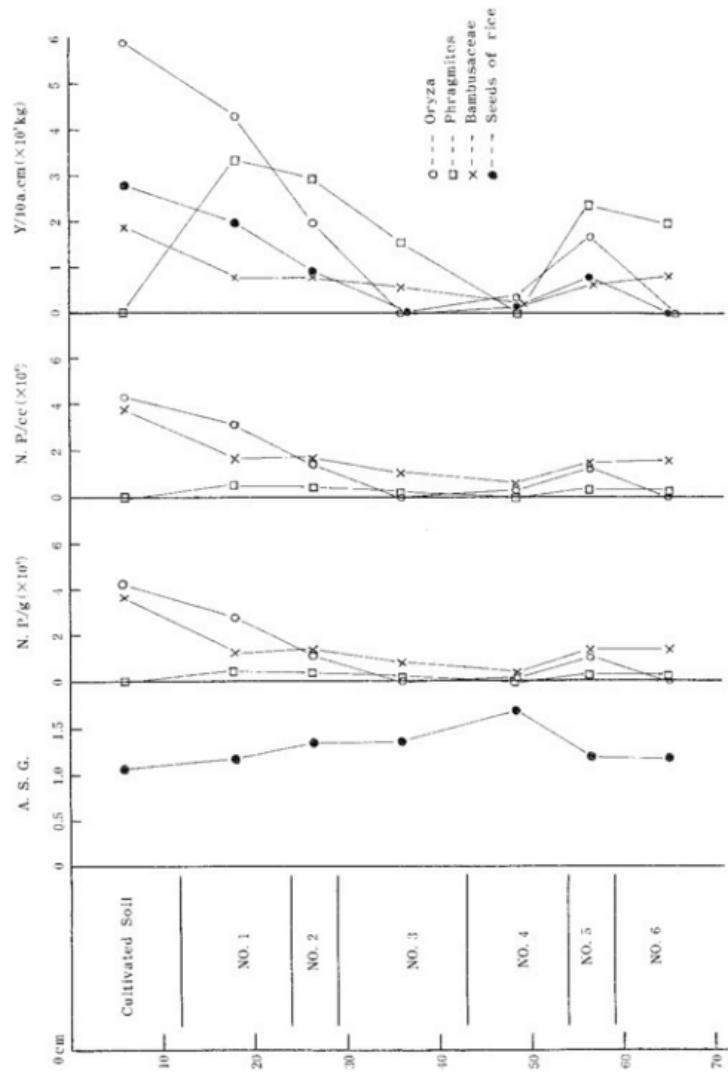
#### 参考文献

- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析による古代栽培植物遺物の探索：「考古学雑誌」62-2・54-62。
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)「考古学と自然科学」9・15~29
- 藤原宏志・佐々木章（1978）プラント・オパール分析法の基礎的研究(2)「考古学と自然科学11」9~20。
- 藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)「考古学と自然科学」12・29~41。



定量分析(ガラス・ビーズ法)ダイアグラム

夫数遠跡におけるプラント・オバール定量分析結果（18グリッド北壁）



## 小 結

昭和55年度国道9号線松江東バイパスにおける埋蔵文化財発掘調査対象遺跡は以上の6遺跡であった。この概報のおわりにこれらの調査の成果を私見を加えながら簡単にまとめて結びとしたい。

石台遺跡Ⅰ区と春日遺跡Ⅰ区とはバイパスルート内で、それぞれ馬橋川、意宇川にかかる橋台部がその調査対象区域であり、いずれも遺跡の全貌を知ることは出来ない。石台遺跡は当初予想されていた縄文時代、あるいは弥生時代の遺構は検出することはできなかった。僅なこれらの時代の遺物を採取したのみである。土層の観察から、この調査区一帯が数度にわたり湿地や、中ノ海や大橋川に続く入江のようになっていたことが考えられる。発掘調査から知り得たその上限は、縄文時代晚期であり、下限は中世である。このあたり一帯が水田として利用されたのは少なくとも近世以降であろう。出土した遺物は磨滅しているものなく、付近に遺跡があることは間違いないようである。また、春日遺跡は、縄文時代から中世までの各時代の遺物が発見された。これらは皆小片であり、ことごとく、また、著しく磨滅している。その各土層より出土した遺物は必ずしも層序に適合している訳ではない。遺物は明らかにかなり遠くから意宇川によって運ばれてきたものであり、土層は意宇川の氾濫の歴史を示していた。

才ノ岬遺跡は、出雲国分寺跡の北方約400mのところにあって、標高約25mの低丘陵上と、その下の水田部を含めた広範囲にわたる遺跡である。水田部は石台遺跡Ⅰ区と同様、中世までは湿地帯であったと考えられる。丘陵部はその頂上と南側斜面に掘立柱建物跡を中心とした遺構と、それに伴う遺物を検出した。掘立柱建物跡は全て2×3間であり、中でも頂上部平坦面のS-B01は規模が大きく、ひときわ目立った存在である。注意されるのは、検出した他の遺構は全て丘陵の南斜面に築かれた加工段に集中していることである。水田部から多くの遺物が発見されたが、それらは、この丘陵部からの流入ばかりではないようである。さらに、丘陵部、水田部の遺物の中で注目されるのは、土馬、土鈴、鉢形石製模造品、ミニチュア土器、土玉等、これまで祭祀遺跡から出土している遺物が多数あることである。同時に出土した須恵器は、概ね7世紀中葉から8世紀後半にかけてのものと考えられ、この遺跡の時期を示している。この才ノ岬遺跡の性格を祭祀遺跡として間違いかどう。水田部から出土した木製品の茅柱や火鎮臼も、ここで行われた祭祀に使用されたものである可能性が強い。特に水田部出土の遺物の中でも祭祀に関係すると考えられるものは、丘陵上で祭祀がとり行われた後、故意に施棄されたと思われるふしがあり、この遺跡での祭祀形態をある程度復元することも可能となってくる。この遺跡の存在する丘陵はその頂上で松江市竹矢町字才ノ岬と松江市馬渕町字才ノ岬とに二分され、両方にその地名が残っている。これは、少なくとも近世以来の竹矢村と馬渕村の邑境であった。山陰地方には、今だ数多くの才ノ神信仰が残っており、その中には粟馬、土製馬、石馬を奉納し祭祀が行われている興味深い民俗例もある。この遺跡の場合、現在は祭祀は行われておらず、その伝承もなく、地名を留めているにすぎないが、才ノ岬という地名と、この遺跡の性格には何らかの関係

を想像させるものがある。

中竹矢遺跡Ⅰ区は、出雲國分寺跡と出雲國分尼寺跡とのちょうど中間に位置する。その北側は、全長約24mの中竹矢古墳(前方後方墳)や、史跡出雲國分寺瓦窯跡が存在する丘陵となっていて、この遺跡は、この丘陵の南裾にあたる微高地上にある。検出された遺跡は弥生時代前期から古墳時代初頭の間に築かれた不整形な土壙196基である。とりわけSK23出土の壺形土器は、その器形や腹部下半に故意に穿孔されていること等興味深い資料である。これらの土壙の多くは、墓壙と考えられるが、周囲は溝で区画され墓域として認識されていたらしい。これら土壙墓群の上には遺構は検出されず、瓦、須恵器、またA区からは壺の底部に「井」と墨書きされた須恵器が発見されて、出雲國分寺、出雲國分尼寺、あるいは瓦窯跡等との関係を窺わせる。このような弥生時代の土壙墓群は、島根県下では浜田市鶴石遺跡<sup>註2</sup>、出雲市大神遺跡<sup>註3</sup>があげられよう。鶴石遺跡は前期後半、天神遺跡は中期を中心とする時期であり、いずれも大小の不整形な墓壙に土器が伴い、その中には壺棺を埋納したものが1基ずつ存在する。天神遺跡は出雲平野の微高地上にあり、立地も類似する。また、中竹矢遺跡の墓壙のいくつかは鏡、鏡といった木製品を伴うものもあり、これはあたかも、鶴石遺跡における石包丁、石鎌、土鍬、石鍬といった生活用具が共伴するのと対応するかのようである。

布田遺跡は、意宇平野の中央にあたり微高地上にあり、この遺跡の調査でも特筆すべきいくつかの成果があった。先ずSB01、SB02、SA01(第13図)の掘立柱建物跡を検出したことが上げられる。このような掘立柱建物跡とそれを囲む柵列は、普通、寺院や官衙関係にみられるものである。特にSB01の柱穴の中に板を叢整としたものがある。こうした柱穴は島根県下では初めての例である。この掘立柱建物跡は、その最西端の一部と考えられ、ここよりさらに東方、あるいは北方に向かい遺構が広がっていると思われる。意宇平野には、これまで、出雲國分寺、同國分尼寺等、寺院、官衙関係の遺跡が発掘調査され確認されている。この建物跡も意宇平野における一連の寺院、官衙跡に関係する遺構と考えることが出来よう。今一つは、この遺跡が弥生時代前期から古墳時代中葉にいたる環濠集落の可能性が強いことである。本道工事部分の調査しだいでは、旧意宇川のルートとの関連が明らかに出来るかも知れない。さらに、この集落内で菅玉を製作していた事を確認した。その時期は弥生時代中期である。以前、国道9号線バイパスの調査で、出雲の玉作りの歴史を弥生時代最終末まで遡らせたことがある。しかし、このほどの調査で、再びその歴史を書き変えることになる。これまで弥生時代の菅玉は、鶴石遺跡や玉湯町鳥場2号塚から出土していて、いずれも墳塚からの出土である。前者は前期中葉、後者は後期後半の時期であり、いずれ、こうした調査例も新たに見出す必要が生じてくるであろう。

夫敷遺跡は、前述した布田遺跡に隣接し、同様に意宇平野中央にある微高地上の遺跡である。昭和55年度の発掘調査の最大の成果は、この火敷遺跡における水田跡の検出であろう。水田跡は宮崎大学農学部の藤原宏志先生の現地での直接指導のもとに、プラント・オパール分析結果に基き、これを検出することが出来た。このプラント・オパール分析結果は必然的に発掘調査を慎重にした。その

結果、当初水田跡の存在が予想された第6層のみならず、その上層の第4層にも発見することが出来た。この水田跡の発見は、山陰地方では初めてのものであり、これまでこの地方の弥生時代研究によって稻作が始まっていたということは認識されていたものの、これを水田跡というかたちで実証するまでにはいたらなかった。今後は、水田に伴う灌漑施設の検出や、鍬、鋤といった農耕具、石包丁のような収穫具等を水田跡において発見することによって、この成果をより補強していくことが課題となろう。今後、発掘調査には、水田跡に限らず、理化学的方法を導入していく必要性を痛感するものである。

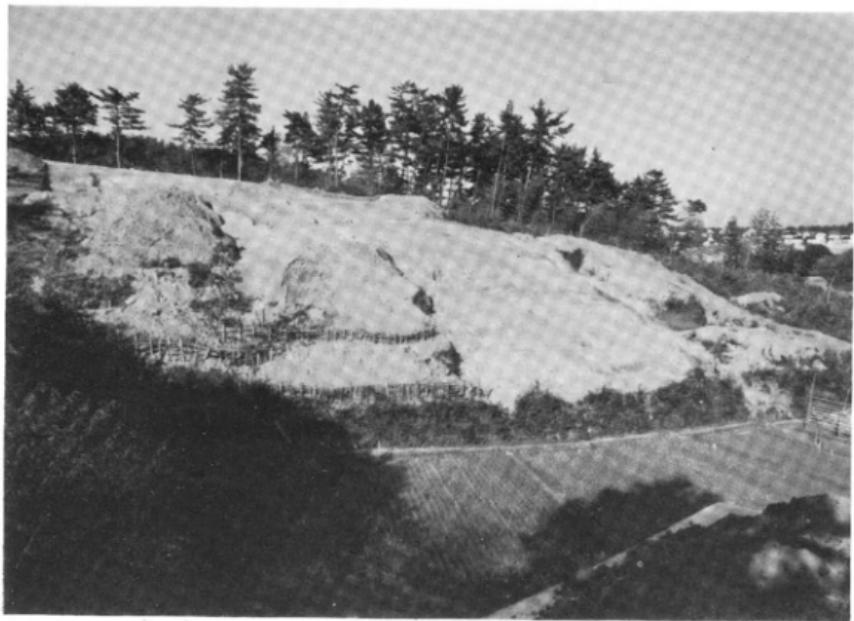
ところで、夫敷遺跡は出雲国府跡の推定地の1つにあげられている。現在、その石碑のある付近にあたる水田構造の南の調査区からはこれを裏付けるような遺構は発見出来なかった。しかし、若干の須恵器片、布目瓦片、中国製青磁、白磁、染付が出土している。この付近に中世の遺跡が存在する可能性がある。

以上の調査から、意宇平野の中にある遺跡は、いずれも畠高地に存在していることがわかる。そこで、中竹矢遺跡1区、布田遺跡、夫敷遺跡の関連性を旧意宇川のルートを考慮しながら考えてみる必要があろう。少し穿ったみかたをすれば、弥生時代のある時期には、布田遺跡という集落、その北に位置する中竹矢遺跡1区の墳墓、さらに、集落の南に広がる夫敷遺跡の水田跡という3ヶ所の遺跡の間に介在したであろう相互関係が浮かび上がってくる。その延長は約1kmに及び、これらを結んだ広がりは、一つの大きな集落社会を想定せるものである。

(内田 律雄)

- 註1. 石塚尊俊「サエの神研究覧書」『山陰民俗』第15号、昭和27年。
2. 山本清編『さんいん古代史の周辺』上、昭和54年。
3. 出雲市教育委員会『出雲市天神遺跡』昭和47年。  
出雲市教育委員会『天神遺跡』昭52年。
4. 島根県教育委員会『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』I、昭和50年、  
島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』II、昭和51年。
5. 玉湯町教育委員会『鳥場遺跡』昭和46年。





1

才ノ岬遺跡丘陵部全景（南より）



2

才ノ岬遺跡水田部全景（丘陵部より）



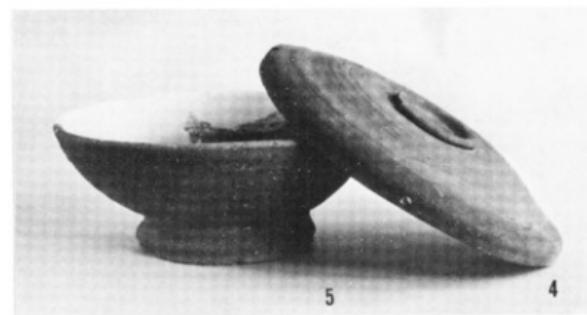
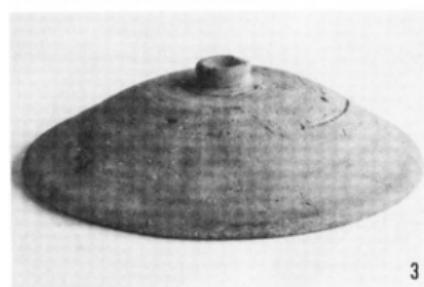
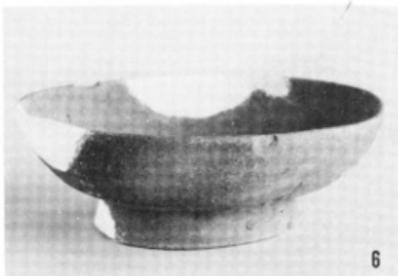
1

オノ崎遺跡第1加工段SB-01（西側より）

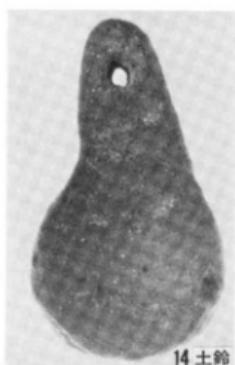
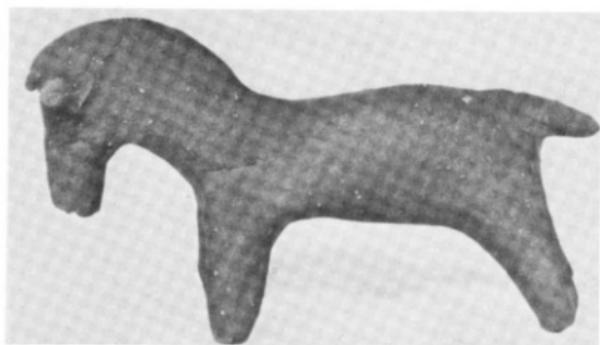


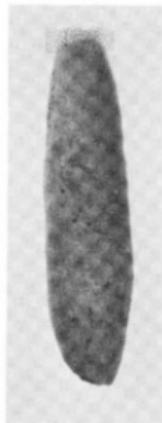
2

オノ崎遺跡丘陵部第1～7加工段（西側より）

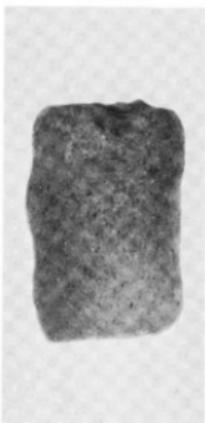


才ノ峰遺跡出土遺物





16 土錐



17 土錐



18 土錐



19 軒平瓦



21 軒丸瓦



20 軒平瓦



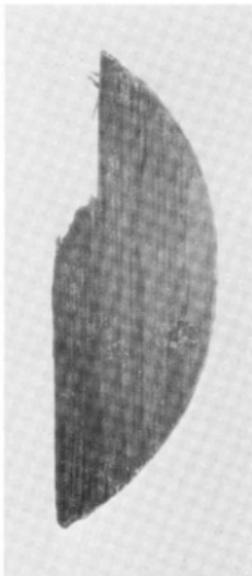
22 軒丸瓦



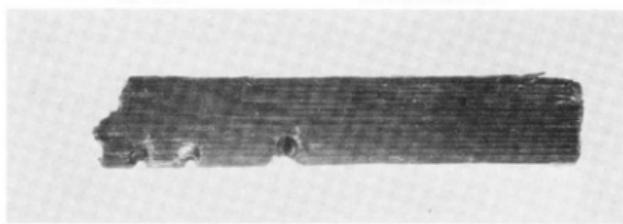
23 下駄



24 曲物容器の蓋



25 曲物容器の蓋



26 火鏡臼



27 火鏡臼



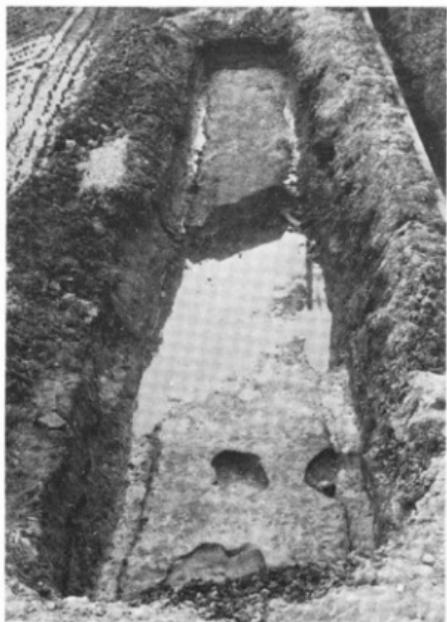
28 琴柱

才ノ崎遺跡出土遺物



1

中竹矢遺跡Ⅰ区A区土塙群（東より）



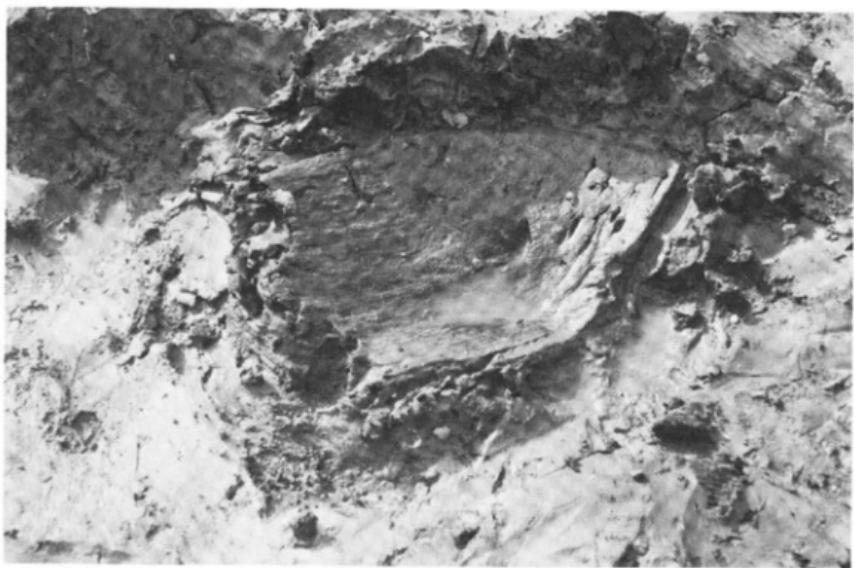
2

中竹矢遺跡Ⅰ区B区SB01（東より）



1

中竹矢遺跡 I 区木製鉗出土状況

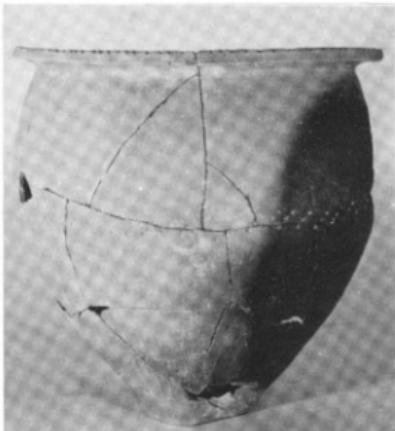


2

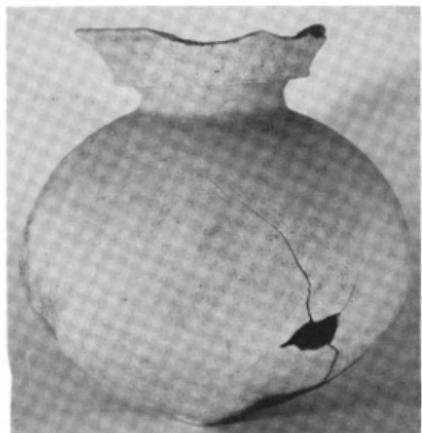
中竹矢遺跡 I 区木製鉢出土状況



1



2

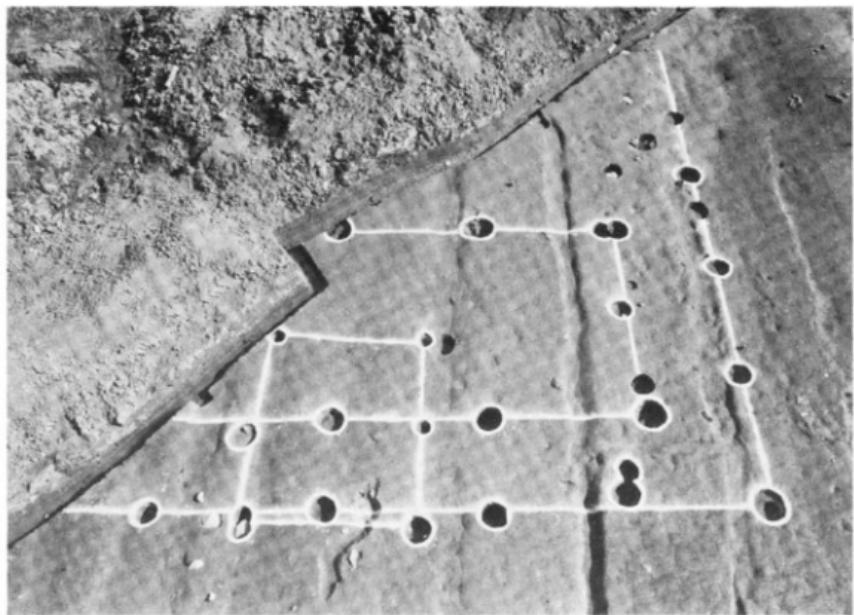


3



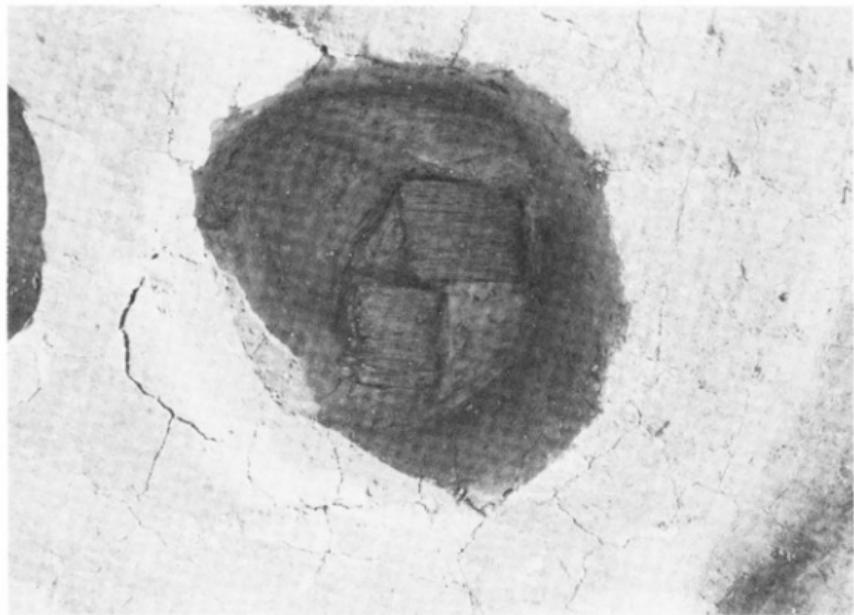
6

中竹矢遺跡 I 区出土土器



1

布田遺跡掘立柱建物 SA01、SB01、02



2

布田遺跡掘立柱建物 SB01 柱穴内礎板



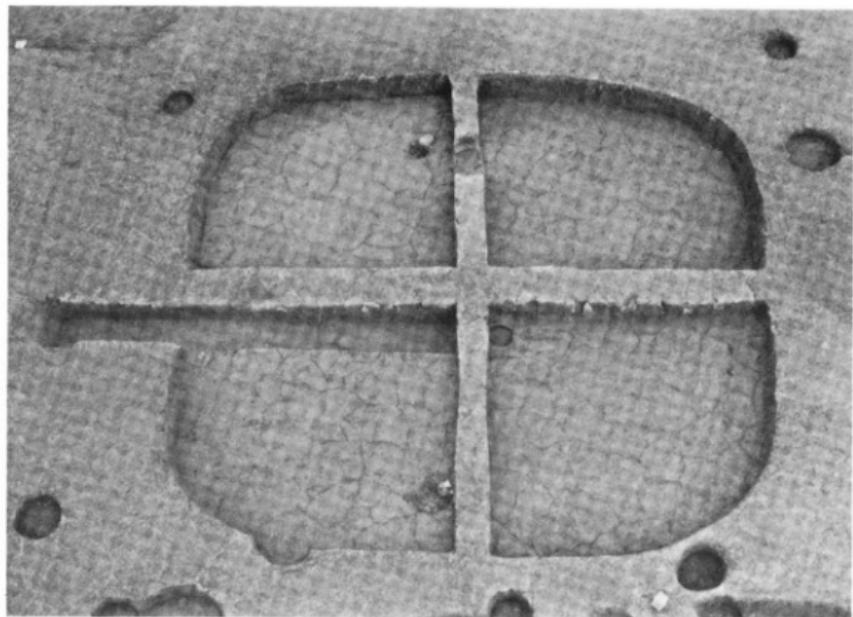
1

布田遺跡 SD 08～10（西より）



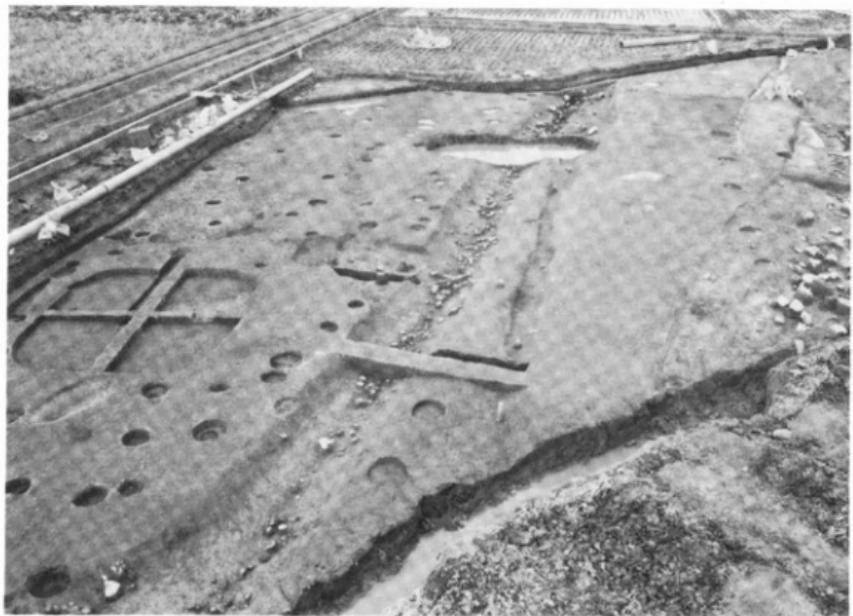
2

布田遺跡 SD 08（右端）、09（右から 2 本目）、10（中央）



1

布田遺跡 S101 (南より)

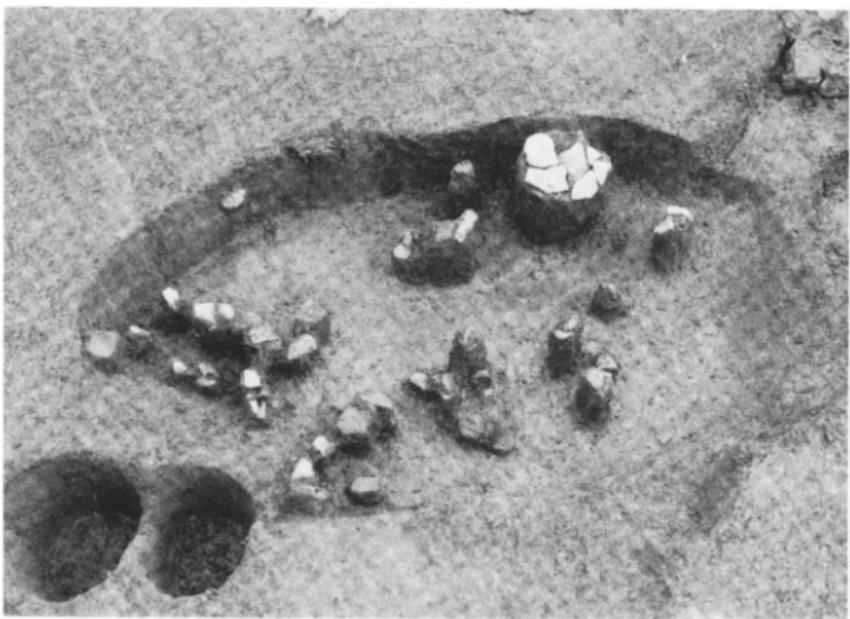


2

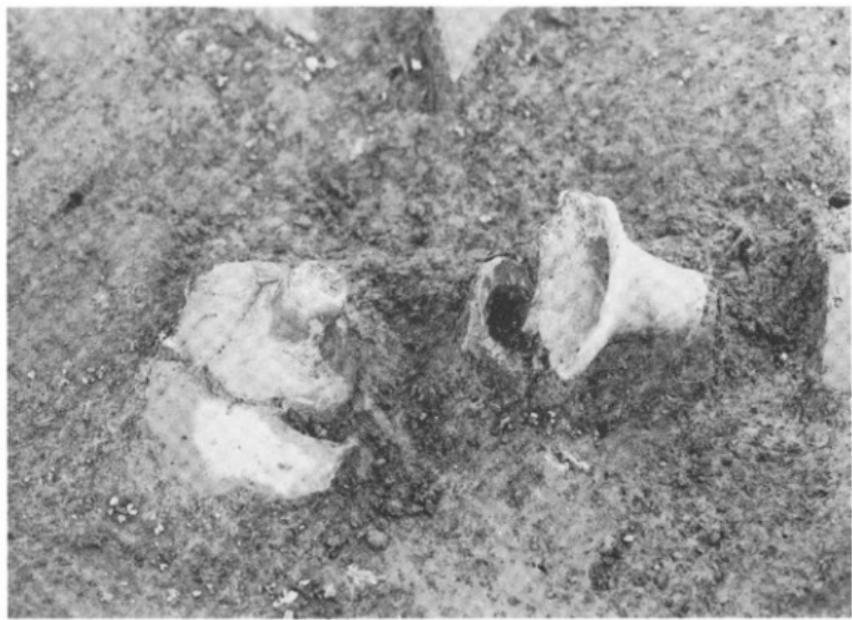
布田遺跡 SD12 (東より)



1 布田遺跡作業風景

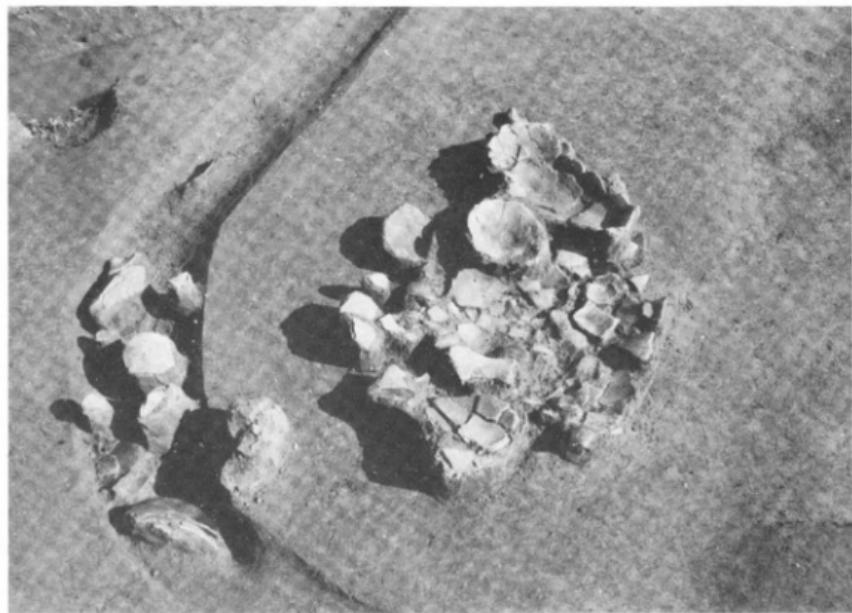


2 布田遺跡 SK 02



1

布田遺跡 SD 11 内高坏出土状况



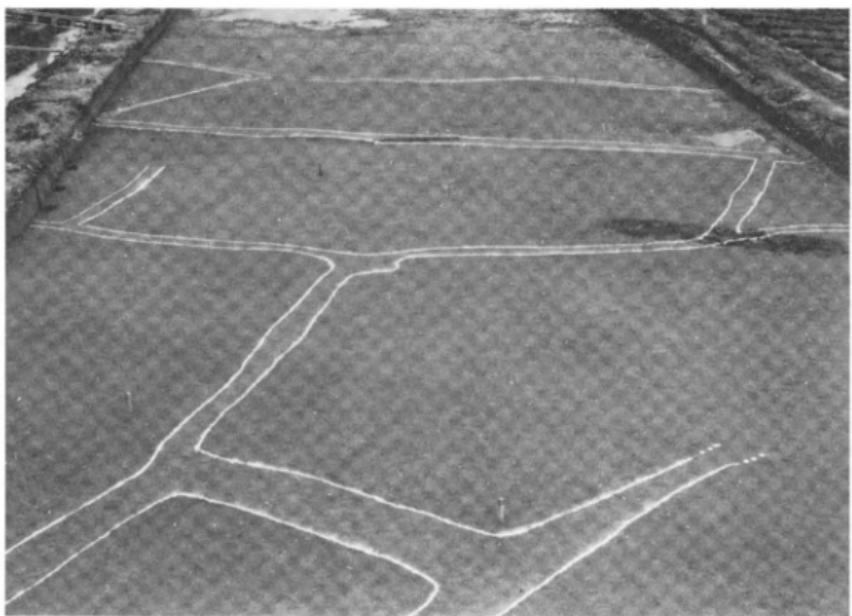
2

布田遺跡 SK 09



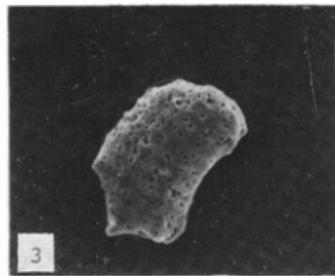
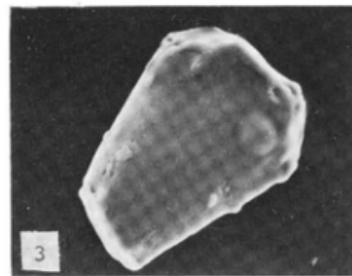
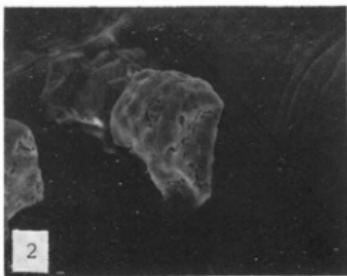
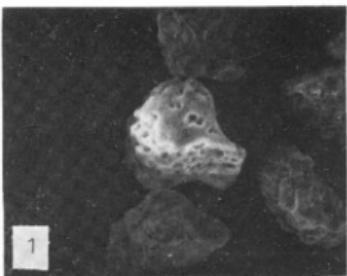
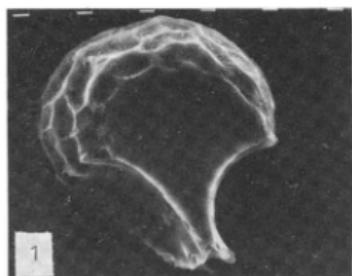
1

夫敷遺跡発掘風景（北より）



2

夫敷遺跡第6層水田跡



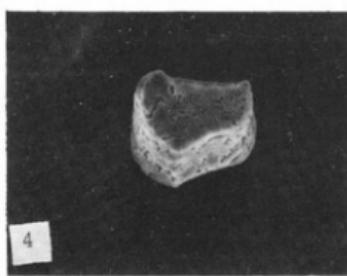
植物珪酸体標本

- 
- 1. イネ × 1500
  - 2. タケ × 1500
  - 3. ススキ × 2000

夫数 5層出土プラント・オバール

---

- 1. イネ
- 2. イネ
- 3. タケ
- 4. ススキ



昭和56年3月15日印刷  
昭和56年3月30日発行

国道9号線バイパス建設予定地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書

編集発行 烏根県教育委員会  
松江市殿町一番地  
印刷 株式会社報光社  
平田市平田町